私は考へた。ナターシヤが早くカーチヤを知りたいと願つてゐる。それにアリヨーシヤも其處に居るだらう。で、行く事にした。然し私はネルリの事が心配になつた。

「暫時お待ち下さい」と言つて、私は階段の所へ出て行つた。ネルリは其處の暗い隅に立つてゐた。

「何故入つて來ないのだ？　あの人はお前に何か言つたの？」

「何にも言はないわ……だけど……厭だわ」とネルリは繰返した。

私は彼女に、私が侯爵と出て行つたら室に入つて戸を締めるやうに敎へた。

「そして、誰あれも中へ入れるんぢやないよ」

「では、貴方は彼と一緒に行くの？」

「さうだ！」

彼女は身慄ひして、私の手を握つて、行かないで呉れと言ふやうであつた。私は彼女のことは明日詳しく訊くことにした。

私達は出た。ネルリがこつそり室に入ると、私は侯爵に一寸待つて貰つて、も一度室にかへつて別れを告げた。彼女は眞蒼な顏をしてゐた。

「如何も不思議な女中ですな。」と侯爵は階段を下りながら私に言つた。「全く不思議だ。私は氣狂

ぢやないかと思ひましたよ。私は實際逃げ出しかけたのですよ。有難いことに先方で逃げ出して了ひました。貴方よく一緒にゐられますね？」

「彼女は癲癇持ちですよ」と私は答へた。

其時私はある事を想像した――マスロボーエフの訪問、彼の今日の話、彼の惡手段を信じさせまいとする說明ぶり、侯爵の來訪．之等が何か連絡を持つてゐるやうに思へた。

八

私達は默つて居た。私は不斷考へてゐた。彼がどんな調子で言ひ出すだらうと、……所が彼は何の分別もなく話し出した。

「私は今酷く氣懸りの事があるのですよ、イワンさん、先づ私は貴方に御相談かけて、意見を伺ひ度いと思ふのです。實は例の勝つた訴訟を却下して一萬留をイフメニエフに讓りたいと思つてゐるのです」

「さあ、分りませんです。ナターシヤさんにでも關したことなら皆さんの爲めに必要なお報せをする考へですが、その事なら貴方自身の方がまして御存じのことですから」

「いえ如何致しまして、……貴方は彼等と御懇意ですから、それが私にとつて大事なんです。貴

方は十分に私を助けて下さることが出來る筈です。私は是非に及ばず譲りたいと決めてゐますが如何な形式で譲つたものでせうかな？　あの老人は傲慢で、頑固ですから、私の厚意を無にしてしまふだらうと思ふのです」

「失禮ですが、貴方のお考へではそのお金は御自分のか、老人のか……？」

「訴訟では私が勝つたのですから、當然私のですよ」

「では、良心では？」

「勿論、私のものです」と彼は少し機嫌を損じて言つた「私は老人が詐欺をしたと言ふのではないですが、彼が仕事を怠慢にしたこと、手落ちのあつたことに罪が有るのです。然し爭ひは此處にある譯ぢやない、あの時の互の侮辱だつたのです。これさへなかつたら何も不正な一萬留を何ともしなかつたのです。或は私が惡かつたかも知れません。私としては少し穩當でなかつたのです。そしてアリョーシャと娘との評判を全く信じたものですから……彼が企んで金を取つたとして了つたのです。で私が此の訴訟を正しいと思つてゐると言つたら、金は彼に與へる事になります。それにナターシャさんの經緯も考へねばなりません。然うなると彼は金を突き返すに違ひないです」

「貴方自身で彼が突き返すと仰言る――では貴方は彼を正直な人と思つておいでせう。彼が貴

方の金を盗んだのでないと判然信じなさるでせう。それなら何故貴方はこの訴訟は不法だからと明言しな　のです。さうしたらイフメニエフだつて多分自分の金を取ることを苦しむことはないでせう」

「そこが大事ですよ。不法だと明言したものなら何で訴へたと彼は私の眼の前で言ふでせう。私はそんな事を言はれる事はない。正當なんだから……自分で自分を誣告するのは苦しいです。」

「私は、二人の人が和解しようと思ふ時には……」

「譯のないことだとお考へですか？」

「さうです」

「否、如何して、それどころか……」

「それどころか、事情がこみ入つた時にと仰言るのでせう。ナターシャさんと御子息との事が貴方に關係してゐる上からイフメニエフ家で滿足する決まりをしておやりにならねばなりますまい。その時には訴訟事件も和解が出來ませう。未だ決してゐないのですから、貴方は只、例の訴訟が正しくない事を承認なさるだけです。必要ならば公然に――是が私の意見です。多分私に虚言を望んでいらつしやらないでせうから――又、何故その金をイフメニエフに譲るのに貴方は迷つて居なさるのですか？　訴訟が正當とお考へなら何故譲り度いと言ふのですか？」

「では、貴方のお考へでは？　いろ〳〵な口實や氣休めを言はねば、如何なにしても老人は金を受け取らないとお思ひになるのですか」

「勿論、受取りやしないでせう」

此の傲慢な疑ぐり深い質問は私の眼にその場で侯爵が唾でも引きかけたかのやうな感を起した。

「貴方は餘りはやり過ぎます。さう思つたやうに行かないものです。然し此の事はナターシヤさんが其の一部は片づける事が出來ませう。貴方から彼女に此の事を傳へて下さい。彼女も多分御相談を願ふのでせう」

「否？　決して、ナターシヤさんは、貴方の仰言る氣安めなしに金を返したなら、貴方が父親には娘の代りに、彼女にはアリョーシヤの代りに、まあお金でお禮するのだと、とるでせう」

「貴方は如何私の言葉をとられたのです？　だが私達は澤山話し合はなくてはならない事がある然し今は暇がない。だが是だけ御承知下さい。要するに事件はナターシヤさんと其の行くさき〴〵の事です。是は何も彼も貴方と私が如何したものか、決めることで多少關係を持つてゐます。これには貴方が必要なんです。それは御分りでせう。ですから貴方がナターシヤさんに味方をなさるなら、私には思ひやりが如何に淺くても、御相談をお避けにはなれない筈です。だが、もう着

きましたよ。……直ぐ其處です。

九

伯爵夫人は華美な生活をしてゐた。夫人は私を懇ろに饗應し、美しい銀のサモワルから茶を汲んで呉れた。座には私と侯爵と外に一人の社交界の紳士とが居た。此の紳士は此處で非常に敬服されてゐた。カーチヤはアリョーシヤと他の室に居たが、私達の來たのを聞くと直ぐ私達の所へ來た。侯爵は直ぐ私達を引き合せた。カーチヤは背の高くない、穩やかな沈着いた顏つきの娘でアリョーシヤの言つたやうに、碧い眼の、うら若い美しさに滿ちた淑やかな金髪の娘であつた。私は理想の美を見ることを期待してゐたが、さうしたものは少しもなかつた。が、それは最初の印象に過ぎなかつた。後になつて私は十分に彼女を知ることが出來た。カーチヤは私と握手して置いて、室の隅へ行き、アリョーシヤと一緒に坐つた。アリョーシヤは私に挨拶しながら言つた。

「僕は少し此處に居るだけです。直ぐあちらへ行きます」

（外交官）私は其の紳士の名を知らないから假りに斯う呼んで置く――は倨傲つた態度で何かの思想を押擴めて饒舌りつゞけた。夫人はそれに耳を傾けてゐた。侯爵は同意を表はさない許りに媚びるやうに微笑してゐた。

夫人は若くはなかつたが、私には二十八を過ぎては居ないやうに思はれた。彼女の顔はまだ艶艶して居た。若い頃は非常に美しかつたらしい。彼は何故か著しく控へ目にしてゐた。が、善良と快活な心が何より目立つてゐた。私には彼女が或る輕薄な行ひと、歡樂に渴いてゐるのと、善良な利己主義とがあることを察した。侯爵と夫人との間には或る關係のあることを知つてゐる。又、侯爵が餘りに冷淡な情人であることも聞いてゐる。今だに關係があるのは何か祕密な企みに因つて相對の義務とでも言つたやうなものがあるやうに思はれた。侯爵は今は夫人に愛想を盡かしてゐるが、關係を斷つことが出來ないのだと言ふ事を私は知つてゐた。

或はそれがカーチヤに對する目論見であつたかも知れない。究り侯爵はアリョ！シヤと夫人の繼娘との結婚を夫人に主張して、それを理由に夫人の渴望してゐる彼等の結婚を避け得たのである。私はアリョーシヤの話に因つて其樣に推察した。

外交官は現在の大勢や、擡頭した革命に、非常に氣を配らなくて好いか如何かと言ふ夫人の問ひに答へてゐた。彼は長い間、落着き拂つて、革命の精神は間もなく一定の惡結果を醸すだらうと主張した。そして人々は此の結果を見て眼が覺めるだらう。社會（勿論その一部を言ふのである）は此の新しい精神を見逃がす上に、經驗して自己の過失を覺るだらう。その時は二重の力で古いものを固守するだらう。經驗は悲痛なりとは言へ非常に有益なもので、如何に此の救ひ主なる

古いものを固守すべきかを敎へる。吾々を度外視して如何なる社會だつて存在しない。吾々は無くなるどころか、勝つのです。世に浮ぶのです。吾々は此際『惡るければ、惡い程宜い』のだ」

公爵は苦々しい贊成の心で微笑した。辯士は一入滿足しきつた。私はうつかり駁してやらうとさへ思ひ、心臟は煮え上つた。然し侯爵の鋭い眼付きが私を止めた。私はこんな連中と一座するのが厭になつた。折よく、アリョーシヤが救つてくれた。彼はカーチヤの使者であつた。私は彼女と並んで坐つた。

暫く二人はきつかけの言葉を見出さなかつた。アリョーシヤは話し出すのを待ち耐へてゐた。

「如何したの？　何も話さないの？」と彼は微笑みながら言つた。

「あら、アリョーシヤ！　隨分だわ……ね、イワンさん、私達は御話しゝなければならないことが澤山過ぎて、何から初めていゝか解らないわ。私達がお近付になるのが餘りおそかつたのです　でも私はずつと前から貴方を存じてゐましたわ。是非一度お會ひ申したかつたのです」

「どうしてゞすか？」

「然うですね、彼はナターシヤさんを一人殘して置いてもお怒りにならないと言つてゐますが、眞實かと思つたものですからね！　あら、アリョーシヤまだゐるの？」

「僕は直ぐ行くよ。さつき言つたぢやないか、こゝに少し居るだけだつて。だがお二人が如何な

話しをするか聞かうと思つて……」

「何時も彼は斯うなんです。少しだ、少しだ。と言つて、夜中までもゐるのですもの。そして——彼女は怒りはしないよ、お人よしだから——と言つてゐますの。驚いて了ひますわ。これで好いでせうか？」

「直ぐ歸るよ、だが僕は無闇に三人で一緒にゐたいのだよ」とアリョーシャは弱つたやうに答へた。

「私達は二人で相談しなくてはならないことが澤山あるのよ。大事なことですからね——よく考へてね？」

「大事な事だつたら僕は直ぐ歸るよ。一寸レウインカの所へまはるが、直ぐナターシャの許へ行くからね。所で、ワーニャさん、貴方は父が訴訟で勝つたイフメニエフ老人のお金を取らないやうにしてゐるのを御存じですか」

「知つてゐます。御親父から聞きました。」

「それを父は如何なに立派な心でやつたでせう！　ところがカーチャはそれを信じないのですよ。此事も説明してやつて下さいな。カーチャ！　さよなら、お願ひだから、僕がナターシャを愛してゐることを疑はないでくれ。僕はお義理にしてゐるのぢやない。如何なに愛してゐるか僕には

解らない。だから僕は罪人のやうに待遇される譯はない。ワーニャさんに聞いて御覽……直ぐ斯う言ふから——ナターシャは嫉妬深いから、非常に私を愛しはするが、彼女の愛には澤山利己主義がある。第一彼女は僕のために何も犧牲にしたくないからだ、と」

「何ですか？」と私は驚いて聞き返した。

「アリョーシャ！　何を仰言るんです」と、カーチャは叫ぶやうに言つた。

「何も驚くことはないよ。ワーニャさんが知つてゐるんだよ。彼女は絶えず僕に一緒にゐて呉れと言つてゐる。まあ言はないでも、さうして欲しいことは解り切つてゐる」

「貴方はそれで恥しいと思ひませんか？」とカーチャは身體中の血を逆上せ乍ら言つた。

「恥しいもんか？　僕は彼女の思つて居る以上に彼女を愛してゐるのだ。だが僕と同等に彼女が僕を愛するなら屹度自分の幸福を犧牲にするだらう。勿論彼女は自分で出して呉れるが、頷つきには厭々らしい。僕には出して呉れないも同じだよ」

「否、それは簡單に言へないわ、アリョーシャ、告白なさい。その事は皆お父さんが言ひ聞かしたことでせう。お願ひですから、私に嘘は言はないで下さい。直ぐ解りますからね。さあ告白なさい！」とカーチャは怒に輝く眼で私を見ながら叫んだ。

「あゝ父が言つたよ。父は何時も彼女のことを賞めてゐたよ。僕は驚いたのだよ。彼女はあんな

に父を侮辱したのに、父は無闇に讃めるのだから……」と、アリョーシャはどぎまぎして答へた。

「それを君は信じますか？　彼女は君に總てを犧牲にしたよ。今でも犧牲にしてゐる。彼女は君に退屈させないやうに、カテリナさんと旨く會へるやうにと、何から何まで君の事ばかり心配してゐます。それは君が今日僕に話したのです。それなのに君は唐突根據もないことを信じて了ふのだ」と私は言つた。

「薄情者よー　彼には恥しいことなぞないのよ」

と、全然人でなしにするやうに、カーチヤは彼に向つて言つた。

「あゝ、何を言ふのかな！　何時でもカーチヤはあんなだからな！　僕は其の爲めに彼女を利己主義者だと言つたのぢやない。僕は只彼女が餘り僕を熱愛するから、普通の道をふみはづすのでお互に苦しいのだと、言ふ積りだつたのです。お父さんも決して悪い意味で彼女を利己主義者だとは言はないよ。僕と同じやうに、彼女が激烈に利己主義を出す程に僕を愛するから將來僕には餘計苦しくなると言つたのさ。だから父は僕を愛するの餘り眞實のことを言つてゐる。何も父は是でナターシヤを侮辱してはゐない」とアリョーシヤは情けなささうな聲で言つた。然しカテリナは熱して彼を責め始めた。侯爵がナターシヤを讃めたのは上面だけの深切で彼を欺く方法である。そして彼等の仲を分けるために、暗々裏にアリョーシヤを彼女に反抗させる計畫だと明言した。

そして、ナターシヤが眞から彼を愛して、眞の利己主義者はアリョーシヤ自身であると說いて彼を次第に怖しい悲しみと後悔の極みへ導いた。彼は何も言はずに沈んで坐つてゐた。

彼女はほんの小娘であつたが、不思議に自信の强い、堅實な信條を奉じてゐた。そして善と正義とに熱烈な生れついた愛を持つて居た。彼女を實際子供とすれば吾々ロシヤ人の家庭では彼女は考へ深い子供の方であつた。

彼は已に種々なことを考へてゐるらしかつた。最初の一瞥では何の美しさも認めなかつた彼女の顏が次第に魅力を增して來た。

アリョーシヤが彼女に戀して行かねばならなかつた譯が解つた。彼には非常に堅固な傾きの意志があつた。アリョーシヤは彼を支配したり、命令したりすることの出來るものに結び着けられることが出來た。ナターシヤも最初の中は彼を引きつけたが、カーチヤはナターシヤに較べて彼女自身が子供でこの先長くこの儘で行かれ相な特徵があつた。彼には彼女と一緒に居る方が、ナターシヤより判然と氣のおけない所があつた。彼等は一層よくぴつたりした男女であつた。

「カーチヤ、もう澤山だよ、お前は何時も正しいのだ。僕はさうでない。お前は僕より心が清いからだ。直ぐ彼女の許へ行くよ。レウインカの所へはさはらないで……」

「貴方は私達の言ふことを直ぐ承いて、いらつしやるところは、眞實に可愛いわ」

「お前はもつともつと、可愛いよ」と悲しげに答へて、出て行つた。

「貴方は侯爵を如何思召して？」

「非常に善くない人だと思つてゐます」

「私も矢張さう思つてゐますのよ。では、ナタリヤさんの事をお訊ねしたいのですが、まあどんなに貴方をお待ちしたことでせう。貴方のお考へでは、アリョーシヤとナタリヤさんとは結婚して幸福になれませうか？　是が第一私のおしまひの決心に必要ですの」

「それははつきり申されません……」

「はつきりでなくとも、如何お思ひになると言ふだけでは？　貴方はお聰明ですもの」

「私の考へでは二人は幸福ではないでせう」

「何故ですか？」

「二人は不相應ですから？……」

「私にもさう思へてよ、私、ナタリヤさんに是非お目に懸りたいと思つてゐますのよ。私と彼女とは澤山相談することがあるのです。さうしたら二人で總ての決着をつけられるやうな氣がしますの。私はあの方を種々に考へてよ。聰明な、眞面目な、美しい方だと……」

「さうです」

「それなのに、彼の方は如何してアリョーシヤを、あんな子供を愛することが出來るでせう？　どうぞお教へ下さいませな」

「それは言はれませんよ、カテリナさん。が、如何して子供を愛することが出來るものか、御存じですか？　それをナターシヤは愛するやうになつたのでせうね？　到底私には說明出來ませんよ。然し貴方は彼を愛してゐますか？」

「あら、解りませんわ、だけど、愛してゐるやうにも思へますの……」

「さうら……貴方は何のため彼を愛するか、お解りですか？」

「さうですわね、然し彼には僞りがないのよ。それが私には非常に好きなの……イワンさん、私は今ナタリヤさんの競爭者のやうに思へますの。如何したら宜しいでせうね。私はこの事を毎日考へてゐますのよ。ナタリヤさんの狀態はほんたうに怖しいのよ。彼は次第に彼の方を愛さなくなつて、私を少しづつ多く愛するやうになるのですもの。」

「さうらしいですね」

「私は非常に迷つてゐますのよ。ですから私は隨分貴方をお待ちしましたわ。何も彼も決めて頂けると思つてね。それで私は斯う考へてゐましたの……若しお二人が愛し合つてゐるやうでしたら、私はあの人達を幸福にして上げなければならないと思ひましたの」

「私は知つてゐますよ。御自分を犠牲になすつたのを……」
「然し、次第に私を愛するやうになりますと私は如何したものかと考へるやうになりましたの。いけない事でせうね……」
「それは自然です。悪いことがあるものですか？」
「私にはさうは思はれませんわ……ですがお二人が不幸になるやうなら、却つて別れた方が宜しいですわね……此の事は詳しく貴方にお伺ひして、それから私はナターシヤさんの所へ行つて、二人で總てを決めようと思つたのです」
「如何きめるのですか、それが難儀でせう」
「私は斯う言ふつもりですの、貴方が彼を愛していらつしやるなら何より彼の幸福を愛していらつしやるでせう。でしたらお別れになるのが本當ですわ、とね、」
「然し彼女がそれを如何執りますかね……」
「私もそれを考へますの、ですが……ですが……私はナターシヤさんを如何なにお氣の毒に思つてゐるか、貴方は信じて下さいませんのね」と彼女は涙ながらに唇を慄はして言つた。私は默つてゐた。ある愛情を感じて私も泣き出したくなつた。何と言ふ可愛い赤ん坊だらう。私はもう訊くのを止めた。

「貴方は田舎へいらつしやるさうですね？」
暫くしてから私は話し出した。
「えゝ、一月も經つたら行くかも知れません。これは侯爵が强請すると言ふことを私は存じてゐますわ」
「アリョーシヤは貴方にお伴して、行くでせうか、如何お思ひです……」
「私考へて居てよ、きつと行くでせう」と彼女は凝つと私を見ながら言つた。
「さうでせうね」
「あゝ、さうなつたら如何なるものですかね、イワンさん、分りませんわ。私は時々貴方に御手紙でお報せしますわね。貴方は是から時々私共の所へいらつして？」
「解りませんね、殊によると、もう來ないかも解りません」
「如何してゞすか？」
「まあ、私と侯爵との關係からですね」
「彼は不正直な人ですわね。では私が貴方をお伺ひしてゐる事は如何考へます？」
「御自身では如何考へます？」
「好いと思ひますわ、早速御訪ねしてよ」

と、彼女は微笑しながら言つた。

「侯爵は私のお金を欲しがつてゐますのよ。彼の人達は私をまるで赤ん坊のやうに言つてゐますの。私はちつとも子供ぢや有りませんわ、可笑しい人達ですわね」と彼女は言つた。私はこの外に澤山彼女と話した。

やがて侯爵が出て來て、もうお暇する時間だと、言つて報せて呉れた。私は別れを告げた。

カーチヤは強く私の手を握りしめて、意味ありげに私を見た。夫人は私に再び來るやうにと、希つた。

私は侯爵と共に外へ出た。

私はカーチヤとの三時間の對談から、彼女がまるつきり男女關係の祕密を知つてゐない、眞の子供であると言ふことを深く認めた。そのために、彼女の重大問題上の話しぶりと、眞面目な調子が非常に滑稽味を表はしさへした。

＋

「一緒に夜食をやらうぢやありませんか?」

と、侯爵は私と馬車に坐りながら言つた。

「私は夜食を執つた事がありませんから……」

と躊躇しながら答へた。

「いや、それに少しお話しゝたいことが有りますから……」と彼は附加へた。

私はそれで行くことにした。

「それではボリシヤヤ、モルスカヤ街のベイ店へ……」

「料理屋へですか?」と私は少しためらつて尋ねた。

「私は何時も家では夜食をやらないです。貴方は私のお招きが嫌ひですか?」

「私は夜食はしないと申したぢやありませんか?」

「一度位宜しいでせう。折角お招きするのですから……」

私は同行を承知した。が自分で自分の分は拂はうと決めた。私達は其處に着いた。

侯爵は粋な道の趣味と知識で二三品の高價な料理を註文した。私は山鳥とフライタを註文した。

侯爵はそれに反對した。

「それは變ぢやありませんか? 失禮ですが、態とらしい反抗です。何か階級的な偏見があるやうですね。それぢや貴方は私を侮辱すると言ふものです」

私はそれに屈しなかつた。

「ではお氣に召すやう……然し、イワンさん私はくつろいでお話しが出來ませうかね？」
「私もさうして頂きたいです」
「貴方は我々仲間との交際を避けるやうになさるが、それは確かに宜しくないですな。第一貴方述なさることを知つて置かれる必要が有りなさる。貴方の小説は一體に、貧しさ、醜い外套、檢察官、短氣な軍人、古い過ぎ去つたこと、異端者の生活とで充ちてゐます」
「私は第一上流社會が退屈ですよ。それに何もすることがないからです。然し私も何れそこへ足踏みするやうになるでせうよ」
「貴方は一年中傲慢な平民主義の中に凝つて、屋根裏の中で衰へてゐなさる。世の中には妙な冒險家もゐます。私はもう氣持ちが悪くなります」
「お談しをかへて下さい。でないと私は屋根裏へ行きますよ」
「悪かつたですな。私はまだ貴方の友人に當らないですから……是は極上の葡萄酒です。如何ですか？」と、コップに酒を注いだ。
「今日は私は非常に愉快です。一體如何した譯か知ら……さう〳〵、私は彼の事を言つたのだつた。今度は貴方に私の言ふ事を解つて頂かなくては……さつきは、お金のこと、六十歳になる馬鹿な年寄子供の話しを初めたのでしたね。」私は驚いて彼を見上げた。彼は未だ醉つてはゐなかつた。

「然し彼の娘には感心しますな。私は愛してゐるのです。少し片意地な所はある。が、棘のないばらは無いつて言ひますからな。そこが憐れつぽい所ですよ。アリョーシヤは馬鹿ですが、私は彼奴を勘辨が出來ますよ。彼の好みに免じて……私もこんな娘が好きでしてな、特別な目的さへあつたが……」
「侯爵、侯爵！　私は貴方の早い變心が解りません。然し、話しを變へて下さい」
「また怒らせましたな。よろしい。だが、貴方は彼女を尊敬なさつてゐなさるか？」
「さうですとも」私は短氣な調子で答へた。
「それに愛してもいらつしやるか？」と彼は眼を細くして言つた。
「貴方はお忘れですね！」と私は叫んだ。
「もう言ひません。言ひません。一つシャンペンを抜きませう、詩人君？」
「私は頂きません」
「さう仰言らずつき合つて下さい。今日は是非一緒に喜びも、悲しみも共にして頂きたいのです貴方は私をお好きになると言ふことを私は信じてゐますよ」
私はそれに贊成した。彼は私を醉ひつぶれるまで飲ましうとしてゐるのではないか、と考へられて來た。酒が來た。侯爵はそれを二つの杯に注いだ。彼は酒を飲みながら言つた。

「彼娘はあの晩私をすつかりやりこめたと思つたでせうね！　如何して彼娘はほうと紅潮を呈するだらうな！　貴方は通人と言つた方ぢやありませんか？　さつと紅味が蒼白い頰へ呈すが、あれを知つてゐますか、いや、又怒らせましたね！」

「然うですとも、こんな話は伺ひ度くないです。私は許しませんよ」

「やあ、御免なさい、話を變へませう。私は貴方が好きです。一つ眞情を掬んで下すつて……」

「御用件を話して下さい、侯爵！」と私は彼を遮つた。

「判つてゐますよ、イワンさん、それが用件になるのですよ。で、言はして下さい。貴方の今の暮し向きのことに就いてゞすな、之は御自身を亡して行くだけです。

出版屋から前借りして、それで借金を埋め、殘りでお茶ばかり飲んで、屋根裏でふるへてゐるさうぢやありませんか？」

「それが何ですか？」

「惡事を働いたよりは立派ですよ。私は知つてゐますよ、貴方の仰言らうとすることは」

「ですから言ふまでもないでせう」

「では屋根裏のことはやめるとして、貴方が月下氷人（げかひうと）がお好きとは少々驚きましたよ。それにアリョーシャは貴方の許嫁を横どりしたんぢやないですか？　所が貴方はシルレル風に、彼等のた

めに助力をなさつてゐる。それは貴方の寛大な心からの他愛もない戯れぢやありませんか？　私なら憤死するところだ。實に恥づ可きことです」

「侯爵！　あなたは故意に私を侮辱するために私をこゝへ連れて來たのですか？」と私は我を忘れて叫んだ。

「そんな事がありますものか！　私は只實際的な人間の立場から貴方の幸福を希つてゐるのです。要するに私はこの事件を片づけたいのです。が、それはさて措いて、何卒私の話を二分なりでも宜いですから終りまで聞いて下さい。さて、貴方は結婚なされませんか？　おや如何したのです。驚くことはないでせう。若し貴方に、確實な永久的幸福を希ふ友達が、妙齡な少しは經驗のある娘を捧げようとしたら貴方は如何なさる……之は解り切つてゐませう。ナタリヤさんのことですよ言ふまでもなく、多少の賠償がある……」

「貴方は氣が違つてゐますね」

「ハ、、貴方は私をなぐらうとしてゐますね」

私は實際彼に飛びかゝらうとさへした。彼は遂に假面をすてゝ見せたのだ。

私は、總て此の事は前から企んだことで、始めから何か目的のあることを豫感してゐた。

私は如何にしても彼の事を聞き取つて了はなければならない狀態にあつた。それは皆ナターシ

ヤの爲めであつた。此の事件はそれで萬事決着がつきさうであつたからである。

だが、如何して彼女に對するこの破廉恥この上もない醜惡な言葉を聞いてゐられよう？　だが侯爵は私のこの聞かねばならないことを承知してゐるやうであつた。それが更に侮辱の感を深めた。彼は私に激烈な反抗を煽ふるやう毒々しい嘲笑ひを續けた。私はそれをぢつと我慢してゐた。

「私にさう怒鳴りつけてはいけない。一體何を怒るのです。私が丁寧に言はうが、露骨に言はうが、貴方は私から何にも他の事が出て來さうには思はなかつたでせう。私はあのアリョーシャの感傷的な戀だの、シルレルかぶれの事だの、ナターシャとの呪はしい關係は倦々したと言ふまでだ、私はこんなことに顏をしかめる時の來るのを待つてゐたのです」

「貴方は私をおどろかせます。私は貴方が解りません。その思ひがけぬ露骨が……」

「私のお話したいのは、世の中に貴方の思ひも屆かぬ性質があるのですよ。まづ若いシルレルを愛撫したり讃めそやして置いて、思ひがけない所で赤い舌をペロリと出してやるのです。貴方は之を醜惡なこととお考へでせう！」

「勿論、さうですとも……」

「貴方は私を苦しめて如何なると思ひます。之は私の性質です。實際少し道化役者に似てゐるかも知れないですな」

「侯爵もう大分遲いですから……」

「何と言ふ我慢のないことでせう！　もう一杯やりながら友達同志のやうに話しませう。貴方はこの事件に關係のある方ぢやありませんか？　だが、私は如何して斯う愉快だらう。實に可愛い程露骨になつた。如何です貴方は女がお好きですか？」

私は答へなかつた。私は只彼の言ふことだけ聞いてゐた。彼は已に二本目を飲み初めた。

「私は夜食の時に女の話をするのが好きでしてね。あゝ、食事がすんだら一つ貴方にフィルベルトと言ふ令孃をとりもちませうか？　如何です。おや私を見ると厭だと仰言るのですか……へゝへ……」

彼は考へ初めた。何となく意味あり氣に私を見乍ら、言葉をついだ。

「貴方が全く知られさうもない自然の祕密を話してあげませうか？　こんな話をすると、貴方は屹度私を罪人だの、淫蕩と惡行の曲者だと言はれるでせう。若しかう言ふことが出來たら、眞からの友にも言はれない、自分で思ひつく事さへ怖ろしいやうなことを、臆せずに話すことが出來たら、此の世界には息詰まるやうな惡臭が立つでせう。世間の道德なんて有難いものですな。豫防的な便利が有りますからな。が私は醜行と淫蕩で責められるが、なあに、ほんの他の人より露骨だと言ふに過ぎないです。勿論これは醜惡なものでせうが、私はそれを認めて、惡いことだ

と言つてゐます。然し私は少しでもお寛恕を希ふのではないです。と言つて貴方を辱しめる謂でもないです。あなたにこの樣な祕密は有りませんかと訊き出さうと言ふ肚でもないです」

「何卒簡單に言つて下さい」と私は侮辱を泛べた眼で彼を見ながら言つた。

「もう二本目も濟んだやうです。可なり醉つたぢやありませんか？」

「ほんの醉つたに過ぎないです。だがこの婆婆に女程の美しい、旨いものがありませうかね、詩人！」

「何故貴方は私に限つて、貴方の祕事や女自慢の話相手に決めたのですか、解らない」

「心配無用、あとで解りますよ。貴方は詩人だ。私を解しきつてゐますよ。で、この猥談と言ふのが面白いのは性慾をそゝりましてな。私は自分の歡樂のためにこんなことを言ふのですよ。巴里の癲狂院に入れられた男の一人ですがな、素裸にはしを引きかけて散歩して、出會ふ人毎にそれをまくつて見せて他人の驚倒を見て、樂しんだ相です。この快樂は多少シルレルまがひの者に赤い舌をペロリとやることに同じでせうよ」

「狂人は然うでせうが、貴方は何と……」

「確かと仰言るか？」と侯爵はハ、、と笑ひ出した。「貴方は正しく考へなすつたな」と彼は傲慢な顏つきで言つた。

「そこでも一つお話しいませう、私と言ふものをお目にかけるためにな。私は二十七八歳位の令夫人と知り合つたことがあります。彼女は秋霜烈日に身を持することゝ怖ろしい慈善家として聞えが高く、それに勢力の範圍が廣く、如何なる者も彼女に尊敬と媚びとを捧げてゐたのです。男も彼女を怖れたのです。が此の女程の淫亂もなかつたでせう。私は彼女の祕密な愛人だつたのですよ。そこでどうすな、私の樂しみで總身が悚然とする程のものは、此の祕密と僞善とでしたよ。彼女が社會で、侵し難いものゝやうに流布されることに對する惡魔の笑ひで、之がたまらない魅力だつたのです」

「何と言ふ嫌惡な話でせう」私は聞くに耐へないやうな情にさへなつた。

「私はもう歸ります。時刻ですから」

「分りました。いや、も少し待つて下さい。も一本やりたいですから……」

「三本も？」

「その三本目と言ふところです。でも一つ優しいお話しがしたい。私はある時一人の娘を眞心から愛し、たことがある……其の娘は私に多くの犧牲を拂つたのですが……」

「それは貴方がうんと絞つたと言ふ　ですか」

と私は耐へられなくなつて、叫んだ。

「一寸待つて下さい。私は醉つ拂ひましたから……」と彼は獨語のやうに言つた。明かに彼は顏色を變へて、疑惑と激怒の熱した眼で私を見つめた。彼は誰にも知られてゐないこの祕密を、私が何處から探つたか知ら、と考へ、これには何か危險な事はないか、如何か考へてゐるらしかつた。

突然彼は嘲けるやうに笑ひ出した。

「そればかりのことが何です。貴方は何か私が絞り上げたやうに言ひなさるが、彼女は私に金を與れたのですよ。彼女は吠えたり、わめいたりしたのです。まるで狂人のやうにな、だが、それは、今假りに貴方がその立派な燕尾服や與れたとする（私の着古した、汚れた燕尾服を指し乍ら）私が貴方にお禮を言つて貰つた。所が一年經つてから、貴方と私が喧嘩した。私にそこで洋服を返せと言ふことになつた。私はそれを着古して了つた、と言つた譯でせう。卑劣なことか知れませんが、お金も、返さずには置かれないのだが、早速使ひ果した大金が出來ないだけでした。何より私にはあのセンチメンタルな戀だの、シルレル張りのことが堪へられなかつたことが原因するのです」

「私は歸ります」私はきつぱり、かう言つて立上つた。

「も少しです。も少しです。では私の最後の話だけ聞いて下さい」と急にその醜惡な口吻から眞

面目な調子に返つて叫んだ。

「今までの私のお話しで私と言ふものが少しはお解りになつたでせう。で、率直に言ひますが、私は金が必要なんです。カテリナは三百萬留から持つてゐる。之が私にうんと役に立つのです。アリョーシャとカーチャとは、この上もない馬鹿者です。私はそれが必要なんだ。だから二人の結婚の成就を一時も早く遂げさせたいと望んでゐる。夫人とカーチャは近くに田舍へ行きます。アリョーシャはそれを是非送つて行かねばならないです。前以てナターシャさんにその事を報せて下さい。センチメンタルな芝居のないやうにね。私は何處までも私の意地惡さで、自分のために立つて行きます。總ては私の考へ通りになる。だから前以てお知らせするのは彼女のためにと思ふからです。私は安心して、アリョーシャが彼女を棄てるのを待つてゐます。もう初まりかけました。それに彼には別な樂しみがあります。……さて、貴方はこれで宜しいですか、まだ、私が何で貴方をお連れしたか、何のために洗ひ洒しの話しをしたが、聞きたいと仰言いますか？」

「さうです」

「實は、私は貴方をこんな難儀なことから救つてあげたいと思つたのです。貴方は彼女を愛していらつしやる。で、私は貴方に彼女を重ね重ねの苦勞から救ふために貴方の勢力を利用されることを希望するのです。でないと事件が益々煩瑣になるばかりです。それと、も一つ、私はこの事

件に對して少し唾でもひつかけたいやうになつたのです。あなたの眼の前でね……」

「貴方は私達に對する惡意や侮辱をこんな露骨な言葉で言はなくては外に手段がなかつたやうです。それで御自分を醜くゝしたことを危ながらない上に私にも恥ぢないらしい。」

「よく當てられた、流石は文學者だ、では仲よくお別れしませうかね」

彼は危なつかしい歩調で、私の方も見ないで出て行つた。給仕が彼を馬車に乘せてゐた。私は路を歩いた。雨降りの眞暗い夜だつた。

第四篇

一

私の激しい憤りを此處には記さないことにしよう。彼奴は自分の惡對を洗ひ洒し私の顏に吐き掛けたのだ。私は何かでこつぴどく、どやされて、身體が潰されたやうに、感じが鈍つてゐた。陰慘な悲しみに私の心は滅入つた。私はナターシヤの苦痛に終ることを氣遣ひ、如何したら最後の苦痛を薄らげ得るか、あてもなく考へてゐた。

私は何處から如何して歸つて來たか氣附かなかつた。ネルリは未だ寢もやらず、戸口で私を待ち侘びてゐるやうであつた。ふとネルリの顏を見ると表情がたゞ事ではない。眼は熱病患者のやうに燃え、形相は怪しく凄じく、私に氣もつかないやうであつた。

「ネルリ、お前何處か惡いのか？」私は身をまげて、彼女の背中に手を當てゝ訊ねた。

彼女は何かに怯えてゐるやうに、私に縋りついて、逆上せたやうに話出したが、何を言つたるか少しも要領を得なかつた。

私は急いで寢臺へ運んだ。が、更に彼女は私に飛びつき、酷く怯えて、私に庇つて呉れるやうに、頼んでゐるやうに確然縋りついて離さなかつた。漸く寢臺に横たはつた時も私の手を執つて離さうとしなかつた。私も酷く戸迷つて、興奮してゐたので、彼女の顔を見つめてゐる中に遂に聲を出して泣き出した。

私の涙を見て、彼女は長い間、何か考へまとめるのに苦しんでゐるやうであつたが、やつとの事で何か思ひつ當たやうに顔を和げた。癲癇の發作の後は、何時も彼女は暫くの間自分の考へを統一することも、はつきり言葉を發音することも出來なかつた。今もそんな樣子があつた。彼女は非常に苦しんで何か私に言ひかけたが、それが解らないらしいのを見て、自分の手で私の涙を拭ひ、それから私の頭に手をあて、自分の方へ引き寄せ接吻した。發作は私の留守の中に起つたことは確かであつた。が、間もなく再び彼女は生氣を失つた。私の許へ來てから二度程彼女は發作を起したが、幸ひ大したことはなかつた。

然し今度は重患のやうである。私は半時間程彼女を見とりしてゐたが、呼ばれたら直ぐ目を覺ますやうに、彼女に竝んで、長椅子を二つ繼ぎ合して、その上で、着更へずに寢た。寢つくまでに幾度となく彼女の方にふり向いて見た。彼女の顔は青褪め、唇は乾いて赤くなり、眠つてゐる時も去らないらしい、或る苦惱と恐怖とを顔に刻みつけてゐた。

明朝も更に悪いやうなら、早速醫者を呼びに行かねばならぬ、と心の中で決めた。

「これはあの侯爵が怯かしたのだ」と思ひつくと、私は慄然とした。

私は侯爵がお金を絞り上げた女のことで、侯爵の話したことを、それとなく思ひ出した。

二

二週間程過ぎるとネルリも非常に快方に向つた。初めの四日間と言ふものは、私と醫者との氣遣ひが尋常ではなかつた。五日目に醫者は、もう大丈夫だ、全快する、と言つた。

此の醫者はネルリが最初發作を起した時來て呉れた。私の知己である獨身者のお人好しであつた。

「もう心配はないのですね」私は愁眉を開いて叫んだ。

「さうです。全快はしませうが、長生きはないでせう」

「えー　如何してです？」私は思ひも寄らぬ談しに、がつかりして言つた。

「永い壽命ぢやないです。心臓をやられてゐますからな、餘病でも出ますと、またぶり返します。その時も快くなりませうが、かうしてゐる中に持つて行かないやうになるでせう」

「では如何しても助ける見込はないでせうか」

「餘病を避けて、穩かに暮して行けば死期も延びませうが、思ひがけぬ靈驗もあるもので、言はば助かることも出來るかも知れませんが、根治はしないです」

「あゝ如何したものでせうね」

「安靜にして、規則正しく服藥することですな。如何もあんなに藥を嫌つてはいけない」

「然うですよ、ドクトル！　今日私が藥をすゝめると、だし拔けに匙を突きのけて、濕して了つたのです。更にやらうとすると、今度は箱を私の手から取つて了つて、床に打ちつけて、涙を流してゐるのです」

「なる程な、發作だな。以前の不幸がみな原因してゐるのですな（ネルリの身の上に就いて、ドクトルは私の話を詳しく聞いてゐた）と言つて見ても、服藥しなくてはなりませんな。言ひ聞かせて見ませうかな」

私達は病人の方へ出て行つた。ネルリは私達の話をすつかり聞いてゐるらしかつた。彼女はこの四日にすつかり窶れてしまつた。私達が彼女の方へ近づくと、彼女は夜具の中に頭を入れ、かすかふやうに微笑を泛べて私達を見てゐた。ドクトルは愛敬よく、藥の效果のあること、病人は藥を服まねばならないことを言ひ聞かした。ネルリは起き上らうとして、不意に手を動かして、匙の藥をみな濕して了つた。

「感心しないことですな。貴方は故爲に濕したやうですが、……も一度藥を盛りませう」とドクトルは靜かに言つた。ネルリはだしぬけに笑ひ出した。

「それは宜しくない。感心しないことです」

「堪忍して下さいな。私藥を服んでよ、屹度……然し貴方は私をお好き？」

「貴女が温しくしていらつしやれば大好きなんだ！」

「大好き？」

「さうですとも」

「それなら今は好かないの！」

「今も好きです」

「ぢや、藥を服むわ……でも私が大きくなつたらお嫁に貰つて下すつて？」

「宜いとも」と彼はこの奇拔な戯談に思はず微笑して言つた。

そして再び藥を持つて行つた。今度も彼女は匙を拂ひ退けた。粉藥は憐れな老醫の上着に散つた。ネルリは大聲を立てゝ笑つた。彼女の顏にはちらつと片意地な殘忍な影が見えた。

「またやりましたね、何と言ふ情けないことだ。さあも一度あけよう」と老人は胸元を拂ひながら言つた。

「貴方は私の根性悪をお憤りでせう」と彼女は言ひかけて、夜具の中に潜つて、ヒステリイらしく泣出した。

「お、お、泣くな、泣くな、泣くな、……神經です。さあ水をお上り……」と老從は言つた。彼は感じ易い人であつた。自分も泣かないばかりになつて言つた。「私は貴女を許してあげる。お嫁にもしてあげる。貴女がおとなしくさへなさつたら……それから……」

「藥を服むの？」と彼女は笑聲と泣き聲とで言つた。

「溫和な子だ。可哀相な子だ」と老醫は眼に涙で言つた。

それから彼とネルリとの間に變調な非常な同情が始まつた。その反對にネルリは私に一層むづかり、神經質になり、腹を立てた。

私は何の譯か解らずに、ぼんやりし切つてゐた。彼女は病氣の始めの中は酷く私に物優しく、愛敬よかつた。彼は何故に私が悲しんでゐるか、何を考へてゐるか、聞いたりしてゐたが、話がナターシヤのことになると、急にむつゝりして、その談を避けるやうにしてゐた。私が家に歸れば喜び、帽子を持つと、悲しげに、私を宛かも責めてゞもゐるやうな眼で見してゐた。

彼女の病氣の四日目に私は夕方から夜更けまでナターシヤの許にゐた。私達は非常に多くの話をしなければならなかつた。

その日アレキサンドラが、ネルリの病氣で私一人で手が足りなくて困つてゐることを聞いて、見舞に來て呉れたのだつた。それで安心して、ネルリをアレキサンドラに見とりして貰つて、長居をした。

人の好いアレキサンドラは馬車に大きな包を乘せてやつて來た。その中には、舍利別、病人用のジャム、林檎に蜜柑、女シヤツ、繃帶に脫脂綿が入つてゐた。

「貴方は獨身でいらつしやるから、こんなものはお宅にはないでせう。これだけは私の勝手にさせて下さいな。夫からも言ひつかりましたから……」とアレキサンドラは言つた。

彼女は非常にネルリの氣に合つて、姉妹のやうに愛し合つた。全體アレキサンドラが宛然子供らしいので、ネルリと好い相手だつた。

彼女はネルリに種々な談しをして笑はせてゐたので、アレキサンドラが家へ歸つて行くと時々退屈することがあつた。

彼女が初めて私の家へやつて來た時は、例の癖で、彼女は無愛想だつた。

「彼女は何だつて私達の許へ來たのでせう」と不平さうに私に訊いた。

「お前を世話するやうに來たのさ！」

「私は彼女にそんなことをしてやつたことがないのですのに、如何してゞせう？」

「情のある人はさうされたから爲よう等と考へてゐないよ。彼女は困つてゐる人なら助けてやりたがつてゐるのだよ。世の中には情深い人は多い。お前が困つてゐる時に、そんな人達に會はれなかつたのは、お前だけの不幸なんだ」ネルリは私の胸に倚つて、長いこと私の手を握つてゐた。

明る日アレキサンドラが來た時、彼女は晴々した顔で彼女を迎へたが、まだ何處かでえぢらつてゐた。

三

私は一晩中ナターシヤの許に居て歸つたので、晩くなつて、最うネルリは睡つてゐた。

アレキサドラも眠がつて居たが、病人を見まもりながら私を待つてゐた。

「私とナターシヤさんの噂を始めて居たのですよ。ですが私には話すことがあまり無いものですから、仕舞には默つて了つたのです。それから泣き出して、この通り泣き乍ら睡つたのですよ。では、イワンさん、さよなら！　私もう家へ歸らねばなりません。では、おやすみなさいませ……又明日……」

翌朝になつて、ネルリは澁々眼を覺して、碌すつぽ口を利かず、宛然私を憤つてゐるやうであつた。ネルリの私に對する態度はすつかり變つてゐた。此後彼女の私への惡感情はこの物語りの

終結する眞近まで續いた。

それから二日と言ふものは私に口一つ利かないで、藥も飲まず、食事まで取らうとしなかつた只老醫だけが彼女を宥めたり、言ふことを聞かせたりすることが出來た。

ドクトルが來る前まで彼女は如何なに悲しさうにしてゐても、何時も晴々しい顔になつて彼を迎へた。彼は又毎日のやうに私達の許へ來た。彼はネルリの笑ひ聲や戯談を聞かないでは居られない程、心を惹かれたやうに見えた。彼はネルリのために、綺麗な箱に入つてゐる菓子を持つて來たりした。

そして、若し或る娘さんが彼の居ない時、おとなしく、お利口だつたら、その娘さんは上等の贈物が貰へる、と言つて、ネルリにそれを遣りながら、「私の未來の花嫁さんへ」と言ふのだつた。この時は彼の方がネルリに增して幸福さうであつた。

それから二人の話が始まるのであつた。

「第一健康に注意なさらんといけない、何よりも生きることが大切だ。第二には何時も丈夫でゐることだ。さうすれば人生は幸福だ。悲しい事は考へないこと、樂しいこと許り考へてな。」

「樂しい事つて如何考へるの？」

ドクトルは少し困惑した風であつた。

「それは……遊びごとでもな――年頃のな、別に何か……」
「私遊びごとなんか嫌ひよ。それより新しい衣物が好きよ」
「それは餘り好くない。質素で滿足するのが好いことだ。が、宜し、宜し新しい着物でも」
「私、お嫁に行く時、澤山着物を作つて下さつて？」
「これは奇想だ。が、貴女がそれに相應な好い行ひをなさつたら、着物も作りませう」
「それから、私がお嫁になつたら毎日お藥を服まなくてはいけないの？」
「その時にはもう服藥なくて好いよ」と、ドクトルはにつこり笑つた。
或る日私は暮れない前に歸つて來た。ネルリは手早く枕の下に書籍を隱した。それは私の書いた小說で、私の居ない間机から取つて讀んでゐたのである。彼女は何で私に隱し立てなどするだらう？　暫時して私が臺所へ行くと、その小說は元の所へ歸つてゐた。
彼女は寢臺から飛び下りて、素速く机の上に乘せたのだ。間もなく彼女は私を呼んだ。
その聲は何處かに落着いてゐないところがあつた。もう四日と言ふもの彼女は私に話らしい話もしなかつた。
「貴方は今日ナタリヤさんの許へいらつしやるの？」
「如何でも會はねばならないのだよ、ネルリ」

「貴方は大層……あの方を愛していらつして」
「あゝ非常に愛してゐるよ」
「私あの方の許へ行つて一緒に暮したいわ」
「ネルリ、それやいけない。お前は私の許が嫌なのか？」私は吃驚して言つた。
「いけない？　だつて、貴方はあの方のお父さんの許へ遣ると仰言つたぢやありませんか？　あそこへ行くのは厭よ。彼の方の許に召使ひが居るの？」
「居るよ」
「彼の方が今の女中を斷れば私が後へ行つて、何かして上げるわ。私の方が愛しますわ。今日いらつしたら話して見て下さいな」
「つまらないことを考へるね。彼女はお前を召使ひに置くと思つてゐるのかい？　お前を置くと言ふことになれば、彼女同樣にか、妹のつもりで置くよ」
「彼の方同樣なんて嫌ひよ」
ネルリは默りこんだ。彼女は泣き度かつたのだ。
「彼の方の愛していらつしやる人があの方を置いて行つて了ふのですつてね？」彼女は遂に斯う尋ねた。私は驚いた。

「一昨日アレキサンドラさんの旦那様が私に話したのよ……」
「おや、マスロボーエフが來たことがあるのか？」
「いらつしてよ」とネルリは眼を落して答へた。
「お前は何故彼が來たことを私に言はない？」
彼奴は一體何の爲めに内證でばかり來たのだ。彼奴に一つ會はねばならぬ。と、私は考へた。
「ネルリ、男が彼女を棄てたら、お前は何とか思ふのか？」
「貴方は彼の方をお嫁さんに貰ふでせう？」
「彼の女は私の様に私を好いて呉れないのだ。そんなことがあるものか」
「私は貴方がたお二人の召使ひにして貰ふわ」
と低い聲で言つた。
それから一夜一言も私に口を利かなかつた。私が出て行くと彼女は泣き出した。そしてアレキサンドラが言つた通り泣いて泣いて泣き通して寢入つたのだつた。
その日から彼女は更に氣難かしくなり、遂に私と口を利かなくなつた。ドクトルにまでさうなつたので、彼も酷く驚いてゐた。
その中に彼女は全快際になつて、少しづゝ散歩して好いと許しを得た程であつた。

私は毎朝出て行つた。私はその度にナターシャの許へ行かねばならなかつた。
私はネルリを伴つて散歩しようと思つて、早く歸宅するやうに決めた。その間ネルリを一人殘して置いた。
私は家へ歸つて來た。家は外から戸締りしてあつた。中に入ると誰も居ない。私はその場に倒れかゝつた。探しまはすと卓子の上に紙片が置いてあつた。それには鉛筆で大きな不恰好な文字で斯う書いてあつた。
「私は貴方の所から出て行きました。再びお邪魔に上りませぬ。然し私は貴方を非常に愛して居ます。貴方にまことなるネルリより」
私は怖ろしさに叫んだ。そして思はず屋外に駈け出した。

四

私は街へ飛び出して、この先如何したものか、見當も定まらないでゐる所へ、門口に馬車が停つて、中からネルリの手を逃れも出來ない程しつかりと摑つたアレキサンドラが降りて出た。
「ネルリ！　お前は何だつて出て行つたのだ」
「まあ、お待ちなさいませ。何よりお部屋へ參りませう。何から話して好いやら、もう吃驚する

ことばかりです」とアレキサンドラは早口に談した。「さあ入りなさい、ネルリ少し寢んでいらつしやいね。病氣上りの身體であんなに駈け歩くなんて……私達は彼の娘の寢つく邪魔しないやうあちらへ行きませう」彼女は私に眼で知らせながら言つた。

けれ共、ネルリは長椅子に腰を下して、顏に兩手を押當てゝゐた。アレキサンドラは急いで概略の話をした。詳しい事は後になつて明白になつた。ネルリは私宛にこの書置をして、第一にドクトルの家へ飛んで行つた。

彼は朝衣を着て、平和に珈琲を飲んでゐた。彼がおやつと思つた暇に、ネルリは彼の首に抱きついてゐた。彼女は泣きながら事細か彼女を引き取つて置いて呉れと賴んだ。

彼女は私と一緒に暮すことは厭だから家を出たのだ。之からは決してドクトルを侮つたり、着物の事も言はない。言ひつけ通り粉藥も服む。それからお嫁に行きたいと言つたのは戯談で彼女の思つてないことだ。と、老醫は私に彼女の事を語つた。彼は酷く呆然として手に持つた葉卷のことを忘れてゐたので、火が何時の間にか消えてゐた。彼は辛つと言つた。

「お賴みはよく飲みこめました。だが、お嬢さん、私の家は貧乏だ。それに貴方は家を逃げて來なすつた。是は非常に宜しくない。又やつと保護者の監督で少し位の散歩をお許した計りなのに保護者の家を棄てゝ駈けていらつした。まだ〳〵身體を大切にしていらつしやらねばならないの

に……了簡に行かぬことで……」

彼女は再び號泣して嘆願したが、老醫は愈々途方に暮れて了つた。遂にネルリは彼を斷念めて、（あゝ私如何しようかしら！）と嘆じたが、その儘室を駈け去つて了つた。（私はその日終日悲ました）とドクトルは話を終つた。次にネルリはマスロボーエフ夫婦の許へ行つた。アレキサンドラは自分の許へ置いて呉れと言ふネルリの嘆願を聞くと、速座に彼女の兩手を捉へた。私の許に何が辛くて居れないことがある、如何してそんな了簡になつたのだ、との質問にネルリは泣いて椅子に縋つた。

「彼娘は亡くなりはしないかと思ふ程、泣き拔いたのですよ」アレキサンドラは話した。ネルリは召使ひにでも飯焚きでも宜いからと賴み、床も掃除するし、シャツの洗濯も敎へて貰ふと言つた。マスロボーエフは直ぐ家出人を私に引き渡すやう言ひつけた。

途中アレキサンドラまで貰ひ泣きして、二人は泣き通して來たのだ。

「如何したの、ネルリ、あの方がお前を叱りでもしたの？」と眼に涙でアレキサンドラが訊ねた。

「否！　叱られはしないの……私は彼の許に居たくないわ……私は根性惡なのに、あの方は慈悲深いんですもの……」

「何故お前はあの方に根性惡なの？」

「あの……」

「私はあの娘から（あの……）と言ふことだけ聞き取つた　ですよ」と涙を拭ひながらアレキサンドラは言つた。

彼女は顔を枕に埋めて泣いてゐた。私達はネルリの側に來た。私は跪いて彼女の手に接吻した。彼女は更に強く泣き出した。

そこへイフメニエフ老人が入つて來た。

「少し用事が有つて來たよ、ワーニヤ、御機嫌よう」と彼は跪いて居る私に奇異の表はした目を向けて言つた。老人は酷く顔色が悪く目立つて痩せこけてゐた。

「私、では失禮してよ。用事も殘つてゐますから、晩方またお伺ひします」とアレキサンドラは言つた。

「俺は少し用事で來たんだ、ワーニヤ」

私はその用事をすつかり知つてゐた。彼は私やネルリと話を決めて彼女を貰ひ受けに來たのだつた。老婆は已に孤兒を引取ることを承諾してゐた。私は老婆に此の孤兒の母親もその父に呪はれた女であることを話し、斯んな孤兒を見れば老人も感動して、考へを變へるかも知れない說いた。彼女は進んで老人に孤兒を引き取るやう勸め出した。

老人は早速用事にかゝつた。彼は枕に顔を埋めてゐるネルリの傍へよつて言つた。

「俺には娘があつたのだよ。俺は身よりも可愛がつてゐたのだ。ところで娘は死んだのだ。お前は娘の代りに來て呉れないか」老人は涙を流して言つた。

「厭です。厭です。貴方は意地惡だから」彼女は斯う言つてむつくり起きて老人と對座した「私も意地惡よ。だけども貴方の方がよつほど意地惡だわ」彼女は脣を慄はし、眞蒼になつた。彼は不思議さうに彼女の顔を眺めた。「さうよ、さうよ、よつほど意地惡よ。貴方は自分の娘を赦してやらない上に、忘れようとなさつてゐる。そして他人の子を置かうとなすつてゐる。まあ生の娘を忘れることが出來るの？　私はそんな殘忍な人は眞つ平ですわ」

ネルリはすゝり泣いて、私の顔をチラと見上げた。そしてさめ〴〵と涙を流した。老人は愕然として急に蒼くなり、苦しい表情を浮べた。「如何して私のことをこんなに大騒ぎするのだらう？厭なことよ。私は出て行つて、乞食になるわ」突然ネルリは夢中になつて叫んだ。私は思はず叫んだ。

「ネルリ、如何したのだ！」此の聲は彼女を一層煽つた。

「こゝに居るより、乞食した方がよつほど好いわ。お母さんだつて乞食したわ。亡くなる時言つてよ、貧乏して、乞食した方が、あんなことよりましだつて……少しも恥かしいことはないわ。

一人に貰ふなら恥かしいけれ共、皆に貰ふのですもの。何處でも私を使つて呉れないのだもの乞食になるわ。厭なこと。私は根性悪よ。そらこの通り……」

ネルリは不意に卓子の上の茶碗を床に投げつけた。彼女は狂ひかけたやうに、この狂亂に喜びを感じてゐるかのやうであつた。

「この娘は病氣だよ、ワーニヤ、それとも何だらう。俺には解らない。俺は歸るよ！」

彼は帽子を執つた。彼は宛かもなぐりつけられたやうであつた。

「お前はお爺さんを不愍に思はないのか、ネルリ！　恥を知れ。お前は眞實に意地悪だ」

私は老人の跡を追つて駈け出した。門口まで送るにしても、一言なり慰めてやりたかつた。その時、私が激しく叱りつけたので恐ろしく蒼白めたネルリの顔がまざ〳〵目についてゐた。私は直ぐ老人に追ひついた。

「あの不愍な娘は心を傷めたのだ。あれには悲しみがあるのだ。俺はその創を搔き立てたのだ。飽きたもの飢ゑたものを知らず、と言ふが、飢ゑたもの必ずしも飢ゑたもの知らずさ。では、さよなら」

老人は苦笑して言つた。私は何か言はうとすると、彼は急いで手を拂ひつゝ「何にも言はんで置いて呉れ。それよりあの娘を逃げないやうに用心しろ。逃げ出し兼ねないよ」彼は斯う言つて、さつ〳〵と立去つて了つた。その豫言が的中するとは老人も思ひがけなかつたであら

う。私は部屋へ戻つて見て、驚愕して了つた。そこにはネルリの影も見えなかつた。私は物置へ往き階段に走り出て、大聲で名を呼んでまはつた。隣へも聞きに行つた。彼女は何處を如何逃げたのだらう？　入口一つしかないこの家では、逃げるとすれば、如何しても私が老人と談してゐた所を通らなくてはならない筈だ。私の部屋に戻るまで、階段の隅にでも忍んでゐて、私の目に屆かないやう走り去つたのではないか知ら……まだ遠くまで行く筈はない。私は恐しい危惧を抱いて再び探しに出た。マスロボーエフを第一に訪ねた。二人とも留守だつた。私は委細な書置して、ネルリが訪ねたら報せて呉れるやう書いて置いた。それからドクトルを訪ねたが彼も留守であつた。下女はこの前來たなり其外は來ないと言つた。もう見當がなくなつた。ブブノワの許へも行つたが例の棺桶屋がおかみさんは昨日何かで警察へ呼ばれたなり歸つて來ない。ネルリなぞあの時の儘見掛けたことがないと言つた。私は綿のやうに草臥れて、マスロボーエフの家に歸つて來たが、未だに留守で、書置きは元の儘載つかつてゐた。

私は歸途についた。夜はいつか更けかゝつた。あゝ如何したら宜いのか――彼女は今何處にゐるのだらう？　何處で彼女を探しあてられるものか？　私が嘆聲を漏らした時、ひよつと私はネルリを見つけた。彼女はある橋の上の街燈の下に佇立してゐた。私は直様走り寄らうと思つたが思ひ止まつた。彼女は此處で何をしてゐるだらうと思つた。もう見逃がすことはないと信じたの

で、自ら耐へて、彼女を見張りしてゐた。と、彼女は一人の老紳士の通り過ぎるのを捉へた。その人は歩を運ばせながら何かポケットから出して彼女に渡した。彼女はその人に低頭した。それを目撃した私の胸はぎざ〳〵にゑぐられた。私の愛賞この上ない或物が今目前で汚されてゐたのだ。

涙は限りなく流れ落ちた。彼女は窮してお情を乞ふのではない。彼女は見離されたのでもない残虐な運命に翻弄されてゐるのでも、無情の壓制者に委せられたのでもない。愛情ある友の手から逃げて、思ひ切つた方法で誰をか苦しませようと思つてゐるらしい。宛も誰かにあてつけてゐる様だ。然し何か窺ひ難い祕密が彼女の心に蠢いてゐた。

それから彼女はある商店の明るい窓の下に行き、貰ひものゝ額を數へた。彼女はそれを握りしめると、街を横切つて、雜貨店に入つて行つた。私は戸口に立て何をするか見た。

そこで彼女は粗末な茶碗を受取つた。それは今朝イフメニエフと私に彼女の意地悪を示すために投げ壞したのに非常に似てゐた。私はネルリと擦れすれになつた時に言つた。

「ネルリ……ネルリ……」

彼女は戰慄した。同時に茶碗は手から滑拔けて鋪石の上で壞れた。彼女は顏色を變へた。一瞬また眞紅になつた。それには忍び難ない苦悶と羞恥が表はされてゐた。私は彼女の手を引いて歸

つた。彼女は私を見上げることも出來なかつた。

「ネルリ、お前は物貰ひをしたな」

「え！」と彼女は小聲で答へ〳〵、更にうつむいた。「お前は壞した茶碗を買ふお錢を貰ふつもりだつたのだね？」

「え、……」

「それで私はお前を叱りでもしたのか？　お前はそんな意地張りをして、よく恥かしくないな。よくも、よくも……」

「恥しいわ……」と彼女は消入り相な聲で言つた。涙が彼女の頰を流れ落ちた。

「恥しいのか……ネルリ、俺がお前に惡るかつたら謝罪る。謝罪る。ね、そして仲直りをしよう。」ネルリは私を見た。眼には涙が一杯溜つた。突然彼女は私の胸に縋つた。そこへアレキサンドラが走つて來た。

「あの娘は歸つて來て？　ネルリまあ如何したの？　まあよかつた……何處にゐて？　ワーニヤさん」私はアレキサンドラに何も訊かないやう目配せした。彼女はそれを承知した。

私はナターシヤの許へ是非行かねばならなかつた。で、未だ酷く泣いてゐるネルリと優しく別れて、深切なアレキサンドラに私の歸りまで一緒に居て貰ふやう賴んで、ナターシヤの許へ走つ

て行つた。此夜私達の運命は決した。それで澤山話が有つたが、ネルリの話をして、今日の事件が詳しく語つた。

「ワーニャさん、あの娘は貴方を思つてゐてよ。きつと戀の初めよ……」ナターシャは考へ考へ言つた。

「そんなことが……あの娘はまだ子供ですよ、ナターシャさん」

「だつて、その難がりが、貴方があの娘を察してやらないからのことよ。隨分子供らしい難がりですが、耐へられない所があつてよ。何よりあの娘は私のことで貴方に妬いてゐるのですわ。あの娘は貴方を物足りなく思つてゐるのよ。貴方は察しておやりにならないからですわ。それを泣いてゐるのでせう。今だつて貴方は私のために娘を置いてきぼりにしたでせう。そのために明日は病氣になりますから、御覽なさい。早く歸つて上げたら好いわ……」

「僕は置いてきぼりにするんぢやなかつたが……」

「私がお願して來て頂いたのですからねえ。では歸つておやんなさいな」だが、私は矢張り晩くなつて歸つた。アレキサンドラは私に話した。「あの時のやうに夜も酷く泣いて泣いて、寢入つたのですよ。では、私はお暇しますよ、ワーニャさん」私は深更まで彼女のことを思ひつめて、坐つてゐた。

五

侯爵と共に料理屋で過した一夜から、私はナターシャの爲めに怖れ慮つて居た。彼ははつきりアリョーシャとナタリヤの離別を主張したのだ。そのために、さき〴〵（センチメンタルな事や、シルレル張りの事）がないやうに別れの前支度を私に覺悟させようとした。私には、アリョーシャが侯爵を何處までも優しい父だと信賴してゐることが、この事の危惧であつた。刻々近づいて來るこの別れに、私はナターシャを覺悟させるやう說かねばならなかつた。だが、私はナターシャの心に恐るべき變化を認めた。彼女は私への以前の寬容な所を形骸もなく失つて了ひ、その上私に何彼となく分け隔てするやうになつた。

今や私の慰めは彼女の悲痛を增すばかりであつた。彼女は憂鬱になり、靑い顏をして、私を忘れてしまつたやうな風であつた。

私は、彼女が遂に來る可き別離の始末に苦しんで、絕望を抱いてゐることを察した。

私は彼女と語りもせずに居た。只、此の事件が如何終結するか、恐れを抱いて、待つてゐるばかりであつた。侯爵との話は勿論彼女に話さなかつた。彼女を一層いらだたせることを怖れたからである。私は侯爵と一緒に伯爵夫人の許へ行つたこと、侯爵が酷い醜惡な男だと言ふことを聽

めたと話した　彼女は侯爵のことは聞かうともしなかつた。カーチヤの話は殘らず耳を傾けてゐた。彼女は未だアリョーシヤが侯爵の命令で伯爵夫人とカーチヤを田舍へ送つて行くことを知らないだらうと私は思つてゐた。で、苦痛を和らげるために、それを如何切出したらいゝか私は困惑してゐた。私が言ひかけると、彼女はそれを止めて、何も言はないで呉れ、已にそのことを知つてゐる、と言つた。

「そりや一體誰が話したのですか？」私は驚いて叫んだ。「アリョーシヤですよ」

「アリョーシヤがもう話した……」

「えゝ、それで私はすつかり心を決めてゐますよ、ワーニヤさん」と言つた。彼女は私にこのさき言はないやう、堪へられなさゝうな表情を見せて、注意してゐるやうであつた。

アリョーシヤはしきりにナターシヤの許へ來たが、僅かの時間しか居なかつた。彼は憂鬱な暗い顔をして入つて來て、悸々ナターシヤの顔を見た。彼女は何時も愛想よくもてなすので、直ぐ彼ははしやぎ出した。私の許へも彼は毎日來るやうになつた。實際彼は苦しんでゐたので、一刻も一人で苦しむことを忍び得ないために、私に慰安を求めたのだ。

ナターシヤがアリョーシヤの田舍へ行くことを知つてゐると言つた日、アリョーシヤは私の許へ來て、私に抱きついて、聲をあげて泣き出した。

「僕は情ない男です、ワーニヤさん、僕を救つて下さい。ナターシヤは僕のために不幸な目に遭ふのです。僕はナターシヤを棄てようとしてゐるんです。ワーニヤさん、教へて下さい。僕は二人の中どちらを餘計に愛してゐるでせう。カーチヤか？　ナターシヤか？」

「君の方がよく知つてゐる筈ぢやありませんか」

「否、ワーニヤさん、僕はそんなことを言つてゐるのぢやない。如何したら宜いか解らないのです。只側から見たところで、貴方が如何考へなすつてゐるか、教へて下さい」

「カーチヤさんを多く愛してゐるやうだね」

「違ひます、違ひます。僕はこの上もなくナターシヤを愛してゐるのです。貴方は如何して默つてゐるのですか？　僕がこんなに苦しい時も慰めて呉れないのですね……では失禮します！」

彼は部屋を飛び出して了つた。ネルリは驚いて、二人の話を聽いてゐた。

彼女は未だ寢床で服藥してゐた。アリョーシヤは一度も彼女に物を言つたことも、彼女の事を聞いたこともなかつた。

二時間も經つと彼は再びやつて來た。私は變り方の激しい、彼の晴やかな顏を見て驚いて了つた。

「よかつた、よかつた！僕はこゝから直ぐナターシヤの許へ行つて、カーチヤよりも誰よりも彼

女を非常に愛してゐると言つたのです」

「さうしたら……」

「彼女は何も言はないで、僕を慰めて呉れたのです。僕は自分の悲しみをみんな言つて了つたのです。矢張り僕は彼女なしでは居られないのです。それで二人は結婚することに決めたのです。が、旅に出る前にはその餘裕もないから、旅から歸つた六月の初旬にするのです。カーチャは如何なりますか……然し結婚したらあの女の許へ二人で行きます」

だが二人の別離の日は來た。

ナターシャは病みつかれてゐた。アリョーシャの癇高い聲がすると宛然木の葉のやうに身震ひした。そして夕燒けのやうに逆上せて、彼の方へ行き、慄ひつく程に抱いたり、接吻したり、笑つたりした。アリョーシャは不安さうに彼女に健康を訪ねたり、田舍から直ぐ歸つて婚禮を擧けるのだと言つて慰めたりした。ナターシャは一生懸命で自分を壓へつけ涙を見せなかつた。

ある時など彼は留守中彼女の生活費を置いて行くと言ひ、父から多額の旅費を貰ふから心配はいらないと語つた。ナターシャは厭な顏をした。私と二人になつた時、私は彼女のために百五十留保管してゐると告げた。彼女は金の譯を尋ねなかつた。それはカーチャとナターシャとの最初の最後である面接のあつた前日であつた。カーチャはアリョーシャの手からナターシャに訪問の

許しを乞うた手紙を受取つた。同時に私にもその會見に臨席して呉れるやう手紙で賴んで來た。

私は老夫婦の許にも澤山用事があつた。或る朝老婆は私の許へ何を捨て置いても直ぐ來るやうに使をよこした。私が出頭すると、老婆は悩して發熱して、老人の歸りを待ち焦れてゐた。彼女は話し出した。

「お爺さんはまるで狂人なんですよ。私にはこつそり聖像の前で跪拜したり、寢言を言つたり、昨日まで食事の時匙が見つからないのです。空返事はする、家はしきりに空ける、そして書齋に鍵をかけて引籠つてゐるのです。(俺は訴訟事件の書類を書く)と言つてゐるのです。が、鍵穴から見ると、涙を流して何か書いてゐるのです。さうかと思ふと、眼を光らせて(俺は直ぐ歸る)と言つて飛び出すのです。だが何を書いたか探して見ませう。ワーニャさん、これですよ、見て下さい」

それはナターシャへの手紙であつた。彼は熱烈に、情深く書き始めた。彼は彼女を赦し、自分の所へ呼んだ。次に彼女の無情を責め、彼女は一度でも父母が如何して居るか考へたことはないだらう。意地を張らず溫順しく歸らなければ永久に呪ふ、と嚇し、そして、家庭で立派な新生活したら俺達はお前を赦す。と書いた。私は彼女に思つたことを皆言つた。老人はこの先ナターシャなしでは堪へられなくなつた事、二人を早く和解させることの必要だと言ふ事、だが總て時機

を見計らうことにしなければならない事を説明した。老人は何れナターシャがアリョーシャに棄てられる事を多分聞き知つてゐるから、ナターシャの今の狀態も察して、何より彼女に慰めが必要だと感じてゐた。然し彼は前通り娘に侮辱されたと思ひつめて、自分に勝ち難いのであつた。また娘は早速に彼の許へ來るのではない。或は兩親を思ひ、和解する氣がないかも知れない、と考へたのだ。その爲めに手紙も書き終らなかつたのだ。或は前よりもつと酷い侮辱が起るかも知れない。そして和解の期も長く延びるかも知れない――と私は自分の考へを言ひ終へた。

老婆は話の始終を聞きながら泣いて居た。遂に私がナターシャの許へ行かねばならないと言ふと彼女は慄へ上つて、大事のことを落してゐると言つた。私はネルリの事で眞面目に相談しようと思つた。老父に呪はれた母を持つた憐れな孤兒の以前の生活、母親の死に就いての痛々しい物語、是等が老人を感動さすことが出來るかも知れないと私は思つた。娘を憐む情は老人の傲慢よりも傷ついた自愛心よりも更に强いのだ。

要はうまい動機だが、それはネルリが作り出すかも知れない。老婆は私の話を聞いて居たが、見る見る希望と歡びとで生々して來た。

彼女は進んで孤兒を引取るやう老人に賴むと約束した。彼女はネルリの病氣を氣遣ひ出して、種々訊ねた上、造つてあるジャムを取つて來て、ネルリに持つて行つてやれと言つた。そして私に

は醫者に拂ふ金も無からうと言つて五留持ち出したが私はそれを取らないので彼女は心配した。

がネルリは衣類に困つてゐると聞いて、漸く滿足し、自分の着物の中から孤兒に合ひさうなものを拔き出した。

私はそれからナターシャの所へ行つた。

戸口に一人の男が戸を叩きかけてゐたが、私の跫音を聞くと周章てゝ手を引き後すさりした。彼がイフメニエフと解ると私の驚きは如何なものであつたらう。彼の眼の輝きを今に忘れることが出來ない。彼は恐ろしく周章てゝ失神してゐた。

「おい、ワーニャか？　俺はこゝへ用事でな……ある男なんだ……書記の……此邊へ越したんだが……俺は間違つたのだ……では、さよなら」彼は穩かでない聲で言つて素速く階段を降りて行つた。

それから三日目に私は彼等を訪ねた。老人は沈んでゐたが、可也元氣になつて私を迎へ、訴訟の話をした。

「それはさうし、何時だつたか、お前は誰を訪ねてゐたのだ。一昨日だつたか……」と彼は平靜を粧つて言つたが、眼は外らすやうにしてゐた。私も同じやうにして言つた。

「友達が一人そこに居ます」

「俺は書記を探したのさ。だが家を間違へたのだ。訴訟の一件でな。だが控訴院ではかう決まつたよ……」裁判の話にまぎらはして彼は顏を赧らめてゐた。私はその話を老婆にした。それで彼に知つてゐるやうな振を見せないやう念を押して置いた。老婆はこの上もなく嬉んでゐた。その翌朝イフメニエフ老人は彼の訴訟事件を世話してゐる一官吏に會つた。その官吏は侯爵に會つたこと、老人に彼は一萬留讓ることを明言した。その官吏の許から老人は恐ろしく激昂して私の許へ駈けつけた。彼の眼は爛々と燃えてゐた。彼は早速侯爵に決闘の申込みを傳へて呉れと迫つた。私は呆然としてゐた。彼を宥めようとすると彼は酷く氣を荒立てゝ來て、身體の樣子まで異狀になつた。私は水を取りに部屋に駈け込んだ。歸つてみると、老人は姿を晦ましてゐた。

翌日私が訪ねて行くと彼は留守であつた。まる三日間何處へ行つたのか姿を見せなかつた。

三日目に私達は總てのことを知つた。彼は私の許から眞直侯爵の許へ行つた。が彼に會はなかつたので書置したのである。それには、官吏よりの言葉は承知した。それは自分に取つて侮辱である。その爲めに侯爵に決闘を申込む。此の提議に拒絶は出來ないだらう。拒絶したら公然と恥を發表する、と彼は書いた。侯爵から手紙が來た。彼は官吏に言つた言葉に就き何等の責任を有たないと、白を切りイフメニエフの敗訴は憐憫の至りであるが、その意趣返しの對手は勤まらないと言つた。彼の不義を公表することは御心配無用にして欲しい。それは恥にも何にもならな

いから、と。老人の手紙は其筋に出して置いた。治安警察は相應な處置を取るだらう、と侯爵は返事した。イフメニエフは、宙を飛んで侯爵の許へ行つた。家僕は、侯爵が伯爵家に居ると彼に教へた。老人は伯爵邸へ駈けつけ、階段にさし懸ると、門番が彼を止めた。怒りに昏んだ老人は杖で彼を打つた。早速老人は捕へられ警官に渡された。侯爵は伯爵に説明した。老伯爵はにやりと笑つて、老人放免の手續きをした。三日目に彼は放免され、その上侯爵のお情けで伯爵の老人を憐んだために、放免されるのだと聞かされた。老人は狂人のやうになつて家へ歸ると、寢臺の上で一時間も寢て居たが、ふいに起き上つて、永久に娘を呪ひ、父の祝福を與へないと放言したので、老婆は顚倒して了つた。

彼女は終夜老人を介抱して頭を氷で冷しづめにした。彼は發熱して譫言まで言つた。私が彼等の家を辭したのは夜の三時を過ぎてゐた。

翌日になると老人はネルリを引き取らうとして私の家を訪ねて來た。然しこの經緯はこに話した通りである。歸ると老人は再び病床に横たはつた。

此日カーチヤとナターシヤと會見の約束があつた日で、アリョーシヤとカーチヤのペテルブルグを立つ前日であつた。その會見の席上には私も居た。それは早朝で、老人の未だ訪れない前、ネルリの初回の家出前であつた。

六

アリョーシャはその會見の一時間前にナターシャに前觸れのためやつて來た。私は折よくカーチャの馬車と門前で來合せた。

「今まで私はナターシャさんをお伺ひ出來なかつたのですよ。うちでは厭な程私を出して呉れないのです。」カーチャは階段を上りながら私に話した。彼女は稍々蒼褪めて、非常に氣懸りらしい風であつた。階段を上り切つた所で彼女は立止つて息を吐いた。

「私早速入つて行つて彼女に言ひませう。私は彼女を信じてゐるから氣遣なしで參りましたつてね……」彼女はも一度入口に立止つて私に囁いた。彼女は恐る〳〵まるで科人のやうに部屋に入つた。ナターシャはにつこり會釋した。カーチャは彼女の手を把り、小さな脣をナターシャの脣に合せた。それから改まつてアリョーシャに半時程遠慮して呉れるやう頼んだ。彼女はナターシャと對座して腰を下し、少しの間ナターシャを見詰めてゐた。

ナターシャは自然に微笑して會釋した。

「私は貴女の御寫眞を拜見してよ。お寫眞より餘程お美しいですわ」とカーチャは眞面目に言つた。

「あらほんたう？　私は貴女に見とれてゐますのよ。ほんたうに御縹緻がよくつていらつしやるんですもの！」

「あら私の何處が？」とカーチャは言つて、ナターシャの手を握つて、暫くお互に顏を較べ合つた。

「私達がかうして一緒に置いて頂かれるのは僅か半時間程ですのよ。それもやつとのお願ひでしたのよ。私達は澤山御相談申さなくてはならないのです。……ほんたうに失禮でございますが、貴女は非常にアリョーシャを愛していらつして？」

「非常に……」

「非常に愛していらつしやるなら……彼の幸福も愛していらつしやいますわね」と彼女は悸悸小聲で囁いた。

「さうですとも、心から幸福を望んでゐます」

「その事ですが……私は彼の幸福を作れるでせうか？　私は貴女の彼を取つたのですから何も申されないのですが……」

「それは解つてゐますわ、カーチャさん、貴女もそれを見ていらつしやるではありませんか」とナターシャは平靜に言つて俯向いた。二人の中に孰方がアリョーシャを幸福にするか、孰方が讓

らねばならないか、に就いて、カーチャは面倒な話になることを決めてゐたらしかつた。ナターヤのこの返事は話すまでもないこと、直ぐ了解して、彼女は不思議さうにナターシャの顏に見入るのであつた。

「貴女は彼を非常に愛していらつして?」と突然ナターシャが訊いた。

「さうですわ。私もその事をお伺ひに參つたのですよ。そして貴女は彼の何處がお好きになつたか話して下さいな」

「知りませんわ」と、ナターシャは堪へられないやうな聲で答へた。

「彼を如何したら宜いのでせう? 彼は如何して私のために貴女を見棄てることが出來たのでせうね。私は現に貴女を見てゐて、解りませんわ!」

ナターシャはそれに返事もせず、ぢつと足下を見つめて居た。カーチャはそつと椅子から立上つて、ナターシャを抱き、二人は斯うしたまゝ泣き出した。

「もし私が貴女をどんなにか好いてゐることがお解りでしたら姉妹にして下さいな。私は長く長く貴女を愛しますわ……」

「彼は私達が六月に結婚することを話しましたか?」とナターシャは訊ねた。

「話してよ。貴女もそれに同意ですつて。でもそれは彼を慰めるだけぢやなくつて?」

「さうですとも」

「私この先彼を非常に愛しますわ。ナターシャさん。彼は間もなく私の夫になることになつてゐますの……その爲めに旅に出るんですよ。さうなれば貴女はお歸りになるのですか、お宅へ?」

ナターシャは答へなかつた。默つて強く彼女に接吻した。「何卒幸福にお暮し下さいませ」と彼女は言つた。「そして貴女も御同樣に……」とカーチャが言つた。その時戸を開けて堪へられないやうにアリョーシャが入つて來た。二人が抱き合つてゐるのを見て、彼は苦しさうに彼女達の前に跪いた。

「お別れするのが悲しいの、アリョーシャ、でも六月には歸つていらつしやるぢやないの」

とナターシャは彼に言つた。

「そして御婚禮もその時でせう」とカーチャも彼の氣安めを言つた。

「僕は一日だつて、お前とは離れられないのだ。お前は俺にどんなに大切か、お前は知らないのか……」

「では、伯爵夫人は幾日かモスクワに御滯在になるでせうから、貴方は明日あの人達をモスクワまで送つていらつしやいな。そして直ぐ歸つていらつしやい。あの人達がモスクワをお立ちになる時改めて一月の間お別れしませう」

「それが好いわ。お二人で四日間は一緒にゐられますわ」カーチヤはナターシヤに意味ありげな目配せして言つた。

この取なしでアリョーシヤは極度に歡喜して、ナターシヤを抱き、カーチヤの手に接吻し、私まで抱いた。約束の半時間は過ぎた。馬車に残つてゐたフランスの老女から督促が來た。「私達は二度とお目にかゝれないでせう」

とカーチヤが言つた。

「さうでせうね、カーチヤさん」とナターシヤが答へた。「ではかうしてお別れしませう」

二人は抱擁し合つた。

「ワーニヤさん、アリョーシヤは夜の八時に來ます。彼はこゝに居る譯に行きませんから歸ります。それから私は一人ぎりです。九時頃いらつして下さいな」二人の行つた後、痛々しげにナターシヤは私に言つた。九時になると、アレキサンドラにネルリを託して(茶碗を壞したあと)私はナターシヤを訪ねた。

「これで私達の戀も終りましたわ、半年のいのちでした」と、彼女は私の手を握りながら言つた。彼女の手は燃えるやうであつた。

「貴女は熱がある。今に寒氣がしますよ。溫くしてお寢みなさい。」

「いゝのよ、ワーニヤさん。あれから私は何を考へたとお思ひになつて?」

「そんな心配はお止しなさい」私は、彼女が熱を出しはしないか怖れた。彼女は何かに熱中してゐるやうであつた。

「私は最初から彼を自分のものにしよう、誰一人も見ないやう、誰一人も知らないやうにしたい堪へ切れない望みがあつたのよ。ですが、カーチヤは彼を幸福にする事が出來るやうに思つてよ。彼女には意志があつてよ。彼は眞面目で嚴格なんだわ。その癖自分はほんの子供よ。可愛い女ね。あの人達は幸福であつてくれ。幸福で、幸福で……」

涙と泣きじやくりとが急にどつと許り彼女の胸から迸り出た。彼女はまる三十分と言ふものは正氣に歸らなかつた。此夜遲く私達は別れた。私は彼女の眠りつくまで待つてゐて、マウラに病氣の女主人の傍を離れないで看護するやう賴んで出た。

翌朝九時に私はナターシヤの許にゐた。アリョーシヤも同時に別れにやつて來た。この時の光景を私は話すに忍びない。ナターシヤは勝氣になつて、成るだけ愉快さうに平靜を裝うて居ようと闘つてゐるやうであつたが、絶望であつた。アリョーシヤを長い間狂人のやうに抱き緊め、惱んだ眼できつと見つめてゐた。彼の言ふことは一言も聞き落すまひとしてゐたが、何を言つたか少しも解らないやうすであつた。彼は長い間彼女を悔つてゐたこと、カーチヤへの戀、旅行のこ

と等の詫びを切々に話した。胸に涙がつまつてゐるやうであつた。一箇月すれば歸る。その時二人は結婚するのだ。父も同意してゐる。それに明後日はモスクワから歸る、今は一日の別れだ——と言つて彼女を慰めた。

十一時が鳴つた。私は無理にアリョーシャを歸らすやう說いた。モスクワ行きの汽車は正十二時發であつた。

「萬事貴方にお願ひします。ワーニャさん、僕は永久に貴方の愛に酬いることは出來ないでせうが永久に弟にして下さい。そして彼女を愛してやつて下さい。」彼は階段を下りながら私に言つた。私が氣も顚倒したやうに階段を上つて來ると、ナターシャは部屋の中央に突立つて、怪訝な風で私を見てゐた。急に彼女の眼は灼熱して來た。

「おや……貴方でしたね。貴方は彼を憎んでゐる。私が愛した人を……貴方は私を慰めに來たんだわ……私を呪つてゐる父の許へ歸れつて、私を說きに來たのだわ……厭です厭です。私もあの人達を呪つてやる……歸つて下さい。歸つて下さいー」彼女は夢中になつてゐた。私は出て階段の上り切つた段に立佇んだ。時々マウラを呼んでは樣子を訊いた。マウラは泣いてゐた。かうして一時半も過ぎた。私は魂も消えるばかりに、限りなく苦しみ惱んだ。突然戸が開いて、ナターシャが駈け出して來た。彼女は帽子を被り、マントを着てゐた。彼女はそ

れ程に氣が狂つてゐたのだ。彼女は私の前でばつたり止つた。私はその時氣がついたのです——と彼女は後で話した。

「ワーニャさんーワーニャさんーまあこゝにいらつして……」と彼女は私に兩手をさし伸べながら叫んで、私の腕の中に倒れこんだ。私は彼女を抱いて部屋に運んだ。彼女は氣絕して了つたのだ。私はドクトルの許に走つて行くことに決め、マウラに一時たりと彼女の傍を離れないやう言ひ置いて、外へ飛び出した。私の留守のたつた三十分の間に何が起つたか？　私達が一刻でも遲れたら彼女を殺して了ふところであつた。

私が外へ飛び出して十五分も經たない中に侯爵が入つて來たのだ。

彼は今し方旅立つ人達を停車場に送つて、その歸りがけにナターシャの許へやつて來た。彼は同情に堪へないと言つたやうな眼で彼女を見ながら言つた。

「眞實にお察しゝます。如何なに苦しんでゐられるかゝ解ります。よくアリョーシャを斷念め下さつたー彼を幸福にしてやつて下さつたことをせめてお慰みと思つて下さい。何ともお察し申し上げる言葉もありません。今度のことで私は心にない役割を演じましたが、何れ御立派な心で眞意を御汲み取り下さるやうになると思つてゐます。私は餘程貴女より苦しい。察して下さい」

「もう何も仰言らないで下さい、侯爵！」とナターシャは言つた。

「仰言るまでもなく直ぐ失禮します。だが、私は貴女を娘のやうに愛してゐます。この先私を貴女の父親だと思つて、私に世話さして下さい」

「私を一人勝手に置いて下さい」とナターシャは遮ぎつた。

「然し貴女が御兩親と仲直りなさるも宜いかも知れませんが、貴女の父上は強頑で勝手强い方だ。失禮な言分かも知れませんが、貴女のお歸宅は究極新に叱責と煩悶とに會ふばかりです。貴女は獨立が必要だ。私は義務としても貴女をお扶けしなければなりません。アリョーシャからも相談相手になるやうにとのことです。然し私以外の人に貴女に感心してゐる人があります。それは伯爵のことで、餘程の權勢もあり、已に老境の人だから、お若い方も安心なすつて賴つて差支へないと存じます。私は貴女のことを逐一話して置きました。若し何なら貴女を親戚の一人として、取立てゝ呉れるでせう。彼は今では一時も早く貴方にお目に懸りたいと申してゐる程善良なんです。近頃はまた貴女の父上を立派にお世話したことがあるのです」

「もう私に構つて下さいますな！」ナターシャは辱しめられたやうに、身を反らして叫んだ。彼女は彼の意の中を見拔いてゐた。

「然し伯爵は貴女の父君に取り爲めになる方だと云ふこと……」

「私の父は貴方から何も取りませんよ」

「何と仰言います！兎に角お許して下さらねばならぬ」と彼は縋けて、ポケツトから大きな紙幣束を取出した。

「まあ私の思ひ遣りと、伯爵の深切からの助言で私を使ひさせました同情の證據として、この一萬留を受取つて下さいますやう……」

ナターシャは怒に燃えて立上つた。

「出て行け、金を持つて、腹の中は解つてゐる！卑劣漢！」とナターシャは叫んだ。

侯爵は恐ろしく蒼ざめて立止つた。彼は乞食の如く世に捨てられたナターシャに一萬留の效を信じ切つてゐたのだ。彼は常に淫蕩な老伯爵にかうした取なしをしてゐた。

「そんなにお怒りになつては折角の志を無にすると言ふものです。貴女はお禮言ふことを御存じないやうだ。私は夙に貴女のため誘惑された男の父として貴女を監獄へ入れることが出來たのです。へ、へ、へ……」

私達はその時臺所で其聲を聞きつけ、ドクトルを制して、侯爵の最後の言葉を聞いた。突然ナターシャの（おゝ！おゝ！……）と言ふ絶望の叫聲を聞いた。私は戸を開いて侯爵に飛びついた。私は彼の顔に唾を引きかけ、力一杯に張り飛ばした。彼は私に挑みかゝつたが、二人なので、金包みを取るや否や一散に逃げ出した。ドクトルはナターシャを床の上に扶け上げた。私は一つの

考へに氣附いたので、ドクトルに尙二三時間ナターシャを看て呉れるやう頼んで家へ走つて歸つた。

「ネルリ、お前私達を助けて呉れないか、もうお前以外に望みを懸けられなくなつたのだ。」

私は彼女に熱い接吻をして、言ひ出した。彼女は怪訝さうに私を眺めた。

私はナターシャが棄てられた事、侯爵がナターシャを監獄へ入れると言つて威嚇したり、嘲けつたりした事、老人は(ネルリは嫌ひだらうが)二三日前死ぬ程虐められ病氣してゐる事、その上彼はナターシャが可愛くて和解を望んで居ること、など話した。

「解つたかい、ネルリ」私は涙を流しながら話して言つた。彼女は臆しげに私を見てゐたが「解つたわ—」と囁いた。

「その樣な譯だから、お前を連れて行くと、皆してお前を引き取つて可愛がつたり、訊いたりするよ。さうしたらお前は是迄暮して來たことをすつかり話して上げて呉れ。お母さんのこと、お祖父さんの事、惡い奴に捨てられたことからブブノワの地下室で死ぬまでのお母さんのこと、お祖父さんがお母さんを赦さなかつたこと、何も彼もね。さうするとあのお爺さんも感ずることがあるのだ。お爺さんは娘が棄てられたことも侮辱されたことも助ける人もなく一人でゐることも知つてゐるのだ。ネルリ、ナターシャを救つてお呉れ、一緒に行つて呉れるかい?」

「えゝ」彼女は苦しさうに應諾した。

七

「私は貴方がたの許へネルリを連れて來ました。何卒引き取つて可愛がつて下さい」と私は室に入りながら言つた。

老人は疑はしさうに私達を見た。老婆は何やら仰天してゐたが、やつと我に返り、突然ネルリの側に寄つて、彼女を接吻して、泣き出した。ネルリは少し驚いて彼女の横顔を眺めてゐた。老人は疊つた額に手を持つて行つて、

「頭痛がしてな！　ワーニヤ！」と言つた。

「お前の名は何と言ふのかね」老婆は訊ねた。ネルリは纖細い聲で自分の名を言ひ、次第々々に低く俯向いた。老人は凝つとネルリを視てゐた。

「お前の御兩親はなくなつたつてね？」と老婆は訊ね始めた。

「いゝえ！」とネルリは恐る〳〵囁いた。

「それは聞いてゐた。では、お母さんは何時頃お亡くなりになつたの？」

「近頃ですわ」

「ほんたうに可哀さうね！　お前さんのお母さんは外國人だつてね？　確かそんな話だつたね、ワーニャさん」ネルリは黒い瞳で私を見た。宛で私に助力を乞ふやうであつた。

「お婆さん、此娘のお母さんは英人とロシヤの女の間に生れた女ですよ。ですがロシヤ人に近いのです。ネルリは外國で生れたのです」と私が言つた。

「如何してそのお母さんは外國なんかへ言つたのだらうね？」

「その母親は卑劣な悪漢に欺されたのだ」と老人は老婆に言ひ出した。「その女は父親の財産を情人に欺されて掠められたのだ。その上外國へ連れ出して赤裸にして棄てたのだ。それから或る情深い人が彼の死ぬまで世話をしたのだ。その人が死ぬとその女は父親の許へ歸つたのだつてね、お前の話しでは、ワーニャ！」

ネルリは激しくを胸を鳴らしてゐたが、席を立つて戸口の方へ行かうとした。

「ネルリ！　こゝへおいで、私の傍へ！」彼は彼女の額に接吻し、そつと頭を撫でた。

「お前のお母さんは悪い奴に殺されたつてことを俺は知つてるよ。そしてその父親を愛してゐたこともな……」

「お母さんはお父さんよりも、餘程お祖父さんを愛してゐましたわ」

「お前は如何してそれを知つてゐる」と老人は自分の耐へ性なく聞くのを恥ぢてゐるやうにして

訊いた。

「知つてゐますわ、お祖父さんはお母さんを赦さないで、追ひ出したのですもの……」

老人は何か言はうとしたが、言ひ出せないで默して了つた。

「お祖父さんがお赦しなかつた時、お前達は何處に住んでゐたの？」と老婆は聞き出した。

「長い間お祖父さんを探し廻つたのよ。その時お母さんは私にお祖父さんは昔はお金持ちで工場を建てようとしたのだが、今は非常に貧乏なんですつて、言つたわ……」

「ふむ」と老人は言つた。

「そして斯んなことも仰言つてよ。お祖父んはお母さんを非常に怒つてゐるが、皆お母さんがお祖父さんに申譯のないことをしたからだつて……今では世の中にお祖父さん外何もないと言つてお母さんは泣いてよ。お祖父さんは私を赦して下さらないだらうとも言つたわ。でも、私に免じて赦して呉れるかも知れないと言つて、私を接吻して下すつたわ。」

ネルリは調子づいて話し出した。紅色が蒼い頰にさして來た。老婆は眼に浮んだ涙を默つてハンカチで拭きとつた。

「お母さんがこちらへ來たときは胸が非常に悪るかつたのよ。それで長い間お祖父さんを探したけれ共見つからなかつたので地下室の隅を借りたのよ」

「病人が地下室の隅を？」と老婆が叫んだ。

「さうですわ！　そして貧乏なのは罪悪ぢやない、金持で、人を侮辱するのが罪悪だつて仰言つたわ！」ネルリは次第に活氣づいた。

「そして、ネルリ貧乏でお出で、誰の言ふことも聽くのぢやない。私が死んでも、一人で貧乏して働くのが良い。仕事がない時は乞食をなさい。彼の人の許へ行くんぢやないよ、と仰言つてよ。」

「お前達はワシリエフスキイ島に借りてゐたのか？　ブブノワの許に？」老人はいくらか氣まりが悪い風で訊ねた。

「否、初めはメシチヤンスカヤ通りよ。そこに大尉の奥さんと言ふ人が居たの。そして醉拂ひの役なしになつた官吏がゐたわ。その人はある日大尉の奥さんを打たうとしたので、お母さんが不憫に思つて庇つてやると、其官吏はお母さんを打つたの……」

ネルリは記憶に興奮を覺え眼を輝かし始めた。

「それからお母さんは私を連れて外へ出たのよ。まだ晝のうちでした。その日一日私達は何も食べずに街を歩きました。お母さんは泣きづめに泣いてゐました。そして黄昏近くなつた頃突然お母さんが、アゾールカ！　と叫びなすつたの。すると毛の脱けた大きな犬が何處からか駈けて來て、お母さんに飛び掛つたの。するとお母さんは聲を揚げて、背の高い老人の前にばつたり膝を折つて坐つたの。その人がお祖父さんだつたのよ。隨分汚い着物を着てゐましたわ。所でお祖父さんも驚愕して眞青になり、足下に額づいてゐるお母さんを突き飛ばして急いで行つて了つたの。お母さんは死んだやうに倒れていらつしたの。まはりに大勢の人が集つて來ました。巡査も來ました」彼女は酷く青ざめてゐたが、何も彼も話して了ふやう決心してゐるらしかつた。

「然しそれから如何して別の家へ越したの？」と老婆はそつと泣きながら言つた。

「お母さんはその夜病みついたので、大尉の奥さんがブブノワの家を探して呉れたの。この奥さんも私達と一緒でしたわ。それからお母さんは寢てばかりいらつしたの。お金は一文もなくなつて了つたので、大尉の奥さんとアレキサンドロウ井チさんが世話して呉れました。」「それは宿の棺桶屋のことです」と、私が譯を話した。

「それからお前達はお祖父さんに會はなかつたかい？」と老婆が訊ねた。

「否、お母さんが快くなつた時、私がパン屋に居るとアゾールカを連れてお祖父さんが通つたのです。おぢいさんは私を長いことを見ていらつしたわ。そして恐ろしい顔をしていらつしたから、私は驚いて家へ飛んで歸りましたわ。お母さんに言ふと悪くおなりになると思つて言はずに置きました。三日目にまた行きましたが、心配して走つて歸りました。それから一日經つて、私が出

て衍つて角に出る。そこにアゾールカと一緒にお祖父さんがいらつしたの。私は駈け出して他の側からパン屋へ行かうとすると、又會つて了つたので、吃驚してそこへ立停つたぎり歩けなかつたわ。お祖さんは私を暫く見てゐらつしたが、私の髪を撫でゝ私の手を引いて連れて行きました。その時お祖父さんは杖をたよつてゐました。手がわな〳〵震へてゐるのを見てよ。

お祖父さんは露店で魚と林檎を一つお買ひになつて、革財布からお金を出さうとなさると、手が震へて、五錢銅貨を一つ落した程でした。私がそれを拾つて上げると、私にそれで菓子を買つて下すつて、何も仰言らずに歸つて了ひました。それで私はそのことを皆お母さんに話しますと、お喜びになつて泣いていらつしたわ。そしてこれから決してお祖父さんを怖れないやうに仰言つた。お祖父さんは私を可愛がつて殊更に會ひにいらつしやるのだと言つてゐたわ。翌る日お母さんは朝の中から幾度も私を外へお出しになつたのよ。御自分も私に隨いて來て隱れていらつしたの。次の日もさうでした。がお祖父さんはいらつしやらないのです。それから二三日雨が降つてゐたので、お母さんは風邪を引いて、又寢て了つたの。私に隨いて外へ出たからです。

お祖父さんは一週間も經つてからいらつした。私に又魚と林檎一つ買つて下すつて何も仰言らず行つて了ひました。が、私はこつそり跡をつけましたの。お母さんに敎へて上げようと思ひましたから。お祖父さんは隨分遠方にゐましたわ。私がお話するとお母さんは又非常にお喜びにな

つて、明日はお祖父さんを訪ねて行かうと仰言つた、がその日になると心配していらつして、三日程延ばして、遂に訪ねに行かなくなりました。そして私に仰言るの——ネルリ、私は病氣で行けないから、お前この手紙を渡して來てお呉れ。そしてお祖父さんが如何な風に手紙を御覽になるか見て來てお呉れ。そしてお前はお祖父さんに跪いてお母さんを赦して下さいとお願ひしてお呉れ——と仰言つて非常にお泣きになつて、澤山私に接吻して下すつたの。

私はお祖父さんの許に行き戸を開けました。お祖父さんは卓の前で馬鈴薯とパンを召上つてゐました。アゾールカもその前にお祖父さんを見守つてゐました。

お祖父さんは一人ぼつちで住んでゐました。私を見てお祖父さんは非常に吃驚なすつて、顏色を變へ、身震ひしました。私も怖ろしかつたので、默つて手紙を卓の上に載せました。するとお祖父さんは非常に怒つて、起ち上るなり杖を振りあげました。然し打ちはしませんでした。私を階段の上りがまちへ突き出して了ひました。私が一階を下り切らない中にお祖父さんは後から封の切つてない手紙を投げつけました。私は家へ歸つて皆お話しゝました。それで再びお母さんはお寢りになるやうになりました」

八

此時烈しい雷が鳴り響いて、驟雨が窓硝子を叩いた。部屋は暗くなつた。

「今に晴れるよ」と窓に目を遣り乍ら老人は言つた。「それからお前はお祖父さんに會はなかつたか？」

「會つたわ……」とネルリが始めた。

「その中に冬になつて、雪が舞ひ始めたのです。久し振で前の場所にお祖父さんを見つけました。お母さんはそれまでお祖父さんが外へ出ていらつしやらないので非常に心配してゐらつしたのよ。私は素知らぬ振りをして急いで駈けて行くと、私を追つ駈けていらつして、ネルリー　つて呼びなすつたの。私は氣の毒になつたので立停つたの。するとお祖父さんは私の手を引いて連れて行きました。私が泣いてゐるのに氣附くと、腰を屈めて接吻して下すつたわ。その時私の破れた靴を見て、別にないか、とお聞きになつたので、お母さんは金がなく、お上さんのお情で食つてゐます、と話しますと、何とも言はずに居ましたが、私には靴を買つて下さいました。それから家へ連れて行きました。途中で買つた肉饅頭を、家へ來ると食べよと言ひました。私がそれを食べてゐる時私を見ていらつしやりました。それから私を抱いて、私が何か勉強したか、と仰言いました。でお話すると、毎日三時間宛教へてやるから來るやうにと仰言りました。それから四留枕の中から拔き出して、お前にだけやる、と仰言いました。私は一人になら戴かないわ、つて

言ひますと、急にお怒りになつて、歸つて失せろ、と言ひました。歸つてからその話をお母さんにしました。が、病氣が重る許りです。

私は時々お祖父さんの許へ行きました。お母さんの言ひつけで……お祖父さんは新約全書と地理の本を買つて來て私に教へて呉れました。神樣の事は澤山お話になりました。

お母さんは、毎日何を教はつたか一々私に訊ねました。それから決つてお祈りするのです。私達がモーゼの十戒を讀み始めた時、私はお祖父さんに訊ねました。キリストは互に愛せ、罪を赦せと、仰言つたのに何故お祖父さんはお母さんを赦して上げないの？　と言ひますと、お母さんが私に言はしたのだと、怒鳴つて私を戸の外へ突き出し、もうこゝへ來るなと仰言つたから、私も決して行かないと言つて遣りました。……そしてお祖父さんはその翌日引越しました」

「俺は晴れるつて言つたが、そら陽がさして來たよ。御覽！　ワーニャ」と老人は窓に向つて言つた。老婆は彼の顔を怪訝さうに見てゐたが急に不滿の色をなして言つた。

「ネルリー　お話し、私は話しを聽いてあげる。あんな非道な人は放つてお置き……」

老婆は言葉の終らない中に泣き出した。ネルリは疑惑と驚きの眼を私に向けた。老人は傍を向いて了つた。

「そのさきをお話し、ネルリ！」と私が言つた。

再びネルリは話し始めた。

「私は三日程お祖父さんの許へ行かなかつたの……その間お母さんの病氣は重る許りです。藥を買ふお金もなくなつて來る、私達は食べないでゐましたし、宿の主婦は私達が他人のものを食べてゐるのを責めました。それで私はお祖父さんにお金貰ひに行くと、お母さんに言ひますと非常に喜びました。私はもう二度と私を追ひ出したやうな人の許へ行かないと言つてあつたのですから……お祖父さんの引越先は解つてゐましたから、直ぐその部屋へ行きますと、お祖父さんは矢庭に立上つて、足で床を踏みつけました。私は直ぐ斯う言つたのです。お母さんは大病で藥代に五十哥入用です。そして私達は何も食べないでゐます。お祖父さんは大聲で怒鳴つて、私を階段へ押し出して扉に鍵をかけてましたの。私は押出されながらお金を呉れない中は、階段に坐つてゐますつて言ひましたの。時々お祖父さんは戸を開けて私を御覽になつたの。遂にアゾールカを連れて、私には何も言はず、傍を通り拔けて出て行きました。私はその儘夕方まで坐つてゐましたの」

「可哀相に、寒かつたらうに……」と老婆は叫んだ。「私外套を着てゐました」

「外套を着て居たつて……お前は眞に苦勞をしたね。お前のお祖父さんは何と言ふ人だらう」

ネルリの脣は痙攣つたやうになつた。彼女は耐へ忍んでゐた。

「眞暗くなつてお祖父さんは歸つたのよ。で、私に躓いて、誰だ！　と仰言つたの。私ですと私

は答へました。お祖父さんは未だ私のそこに居たのを御覽になつて吃驚してゐましたが、不意に部屋に駈け込んだと思ふと、直ぐ出ていらつして、そら與るぞ。これが有りつたけだ。お母さんにさう言へ、俺はお前を呪つてやる――斯う言つて、投げつけました。私は暗中でこれを拾つてゐると、お祖父さんは蠟燭を持つて再び出て來て、一緒に五哥銅貨を拾つて下さいました。皆で七十哥ある筈だと言つて、家に歸りました。

それを話すとお母さんは一層惡くなりました。私はお祖父さんに腹が立つて致方がなかつたので、ある考へを始めました。それで、お祖父さん處へ行く途で、橋の上に立つて居ました。そして或る紳士に一留恵んで貰ひました。私は店で一留を銅貨にして貰ひ、三十哥を母の分とし、七十哥を握つてお祖父さん所へ行つてそれを投げつけました。

そら、そんなものはお母さんは貰ひません。それはお母さんを呪つたから……つて言つた逃げて歸りました」

「いゝ氣味だ！　そんな人にはそれが何よりだ」と老婆はネルリを抱きしめて言つた。

「それからお母さんは重くなる一方ですし、お金は少しもなかつたので、私は大尉の奥さんと一緒に物貰ひをして、それで食べてゐました。その中にお母さんも氣附きなすつてよ。ブブノワが私を自分の許へ寄越して、乞食させない方が好いと言つたからよ。お母さんは私のことを聞く

と泣いて、吃驚なすつてよ。アブノワは酔拂つてゐたものですからお母さんの惡口や私を乞食だの、大尉の奥さんと街を歩くのと言ひました。そして其晩直ぐ大尉の奥さんを家から追ひだしたのよ。お母さんはそれを皆聞いて非常に泣いていらつしたが、急に着更へして私を連れて行かうとなさつたの。でも病み疲れて歩けない程でしたから私が支へてゐました。お母さんは祖父さんの許へ行かうとなさつたのです。もう夜は更けてゐました。ふと或家の前へさし懸ると、馬車が次ぎ次ぎに駐つて、大勢の人が出ました。窓は明り、中の方では音樂の音がしました。お母さんは其處で斯う仰言つたの——ネルリ、一生貧乏でお暮し、誰の許へも行つてはいけない。お前もあんな所へ行かれるのですが、お金持で、晴衣でね。私はそれが嫌ひよ。彼人達は非道で殘酷だよ。貧乏で、働いて、乞食をなさい。誰が來いと言つても、貴方達の許は厭ですつて言つてお遣り——と仰言つてよ。私は一生働きます。貴方の許へも働きに來たのよ。娘のやうにしてゐるのは嫌ひです。」とネルリは身體を震はせつゝ言つた。

「いゝよ、いゝよ、ネルリ！」と老婆は言つてネルリを抱いた。「お前のお母さんがさう仰言つた時には御病氣だつたのねえ！」

「氣狂ひだよ」と無雜作にお爺さんは言つた。

「氣狂ひでもいゝわ、私は一生さうしますわ。お母さんはさう仰言ると倒れた程でしたわ」ネル

リは恐ろしく老人にはむかつた。

「私達が警察へ連れられる所へ一人の紳士が來て私達に十留吳れ、お母さんを馬車で屆けて吳れました。それからお母さんは床についたきりで三週間目に亡くなりました。」

「お祖父さんはお赦しなすつたかい？」と老婆は叫んだ。

「赦さなかつたわ、お亡くなりになる一週間程前に、私を呼んで仰言つたの、（ネルリ！　お祖父さんの許へ行つて、私の赦しを願つてお吳れ。そして二三日中に死にますが、苦しいと言つてお吳れ）

私は戸口で大聲でお母さんが死に懸かつてゐます。お祖父さんを呼んでいらつしやる、さあいらつしやい……と言ひますと、お祖父さんは私を突飛ばして戸を締め切つて了ひました。私は戻つて來てお母さんを抱いて上げたの……お母さんは何もお訊きにならなかつたわ……」老人はどんよりした眼であたりを見廻してゐたが、氣拔けしたやうに、ばつたり、椅子に腰を落して了つた。老婆は今は誰關はず咽び泣きながらネルリを抱きしめて居た。

「臨終の日の暮方前、お母さんは私に（今日は死ぬよ、ネルリ）と仰言つて、兩手で私の手を握つていらつしたわ。私はそれから宙を飛んでお祖父さんの許に行きました。お祖父さんは私を御覽になると、飛上つて、眞蒼になりました。そし身震ひしてゐました。

（今死にかゝつていらつしやる）と一言言ひますと、急に周章て出し、杖を持つや否や、帽子も被らず駈け出しました。馬車を呼んで交渉して見たのですがお祖父さんの許には七哥しかないので、笑はれました。お祖父さんは草臥れ息ぎれがしてゐましたが焦つて駈けてゐらつした。その中にお祖父さんは轉げて了ひました。私は扶け起して今度は手を引いて連れて行きました。漸く家に着いて見るとお母さんは死んでいらつしたの……

（意地惡！　それ御覽なさい！）と私はお祖父さんに言ひますと、お祖父さんは、あつと言つて床の上に倒れなすつたの……」斯う言つてネルリは飛立つた。けれ共老婆は再び彼女を抱いて酷く感動したやうに叫んだ。

「私はこのさきお前のお母さんだよ。お前は私のいゝ子だ！　ネルリ！　さあ行きませう！　あの意地惡な人を放つて置いて……彼の人達は私共を笑つてゐます。神樣は必ずあの人達に復讐するでせう。ネルリ、此處から出て行かう！」私は嘗つて老婆が斯くまで興奮したところを見た事がなかつた。

「何處へ行くのだ？　お婆さん」老人は椅子から立上つて訊いた。「娘の……ナターシャの許へ！」

彼女は叫んでネルリを戸口に引張つて行つた。「少し少し、待つて呉れ！」

「待たれるものですか？　非道な意地惡！　もうおさらばです……」斯う應へて、老婆は後を振

り向いた。老人は帽子を掴み、彼女の前に立はだかり、震へる手で周章しく外套を着た。「貴方も……貴方もいらつしやる！」と彼女は叫んで、祈りのさまに手を重ね、彼を訝しげに眺めた。

「ナターシャ！　俺のナターシャ！　娘は何處だ！」遂に老人は胸から叫び出した。そして戸口へ駈けて行つた。「あゝ赦しなさつた！　あゝ赦しなさつた！」と老婆は叫んだ。

然し老人が玄關に行き着かない中に、戸がぱつと開いて、蒼白めたナターシャが駈け込んで來た。彼女は父親を見て、わつと聲を揚げ、その前に兩手を差し出しながら、はたとひれふした。

九

然し彼はもう彼女を堅く抱きしめて居た。彼は彼女を椅子にかけさせ、自分は彼女の前に跪いた。そして彼女の手や足に接吻した。老婆は胸に彼女の頭を壓し着け、一言も言ひ表はす氣がなくなり、抱擁した儘呆然となつてゐた。

「俺の生命……俺の歡び……」老人は戀した男のやうに、彼女の蒼白め、面窶れた顏や涙に輝く眼を見ながら叫んだ。

「少し痩せたやうだ。だが、ほんたうに縹緻が好い。前よりも一層綺麗になつた！」と、胸の破れさうな喜びの痛みに、思ふやうに舌もまはらないやうであつた。

「お起ち下さいな、お父さん、私にも接吻さして下さい！」とナターシャが言つた。

「よく言つた！　聞たいか、お婆さん！　彼女の言つたことは立派だよ」老人は身震ひして彼女を抱きしめた。

「ナターシャ！　俺は、お前の赦しのない中は足下に跪いて居らねばならない。俺はお前を勘當した。お前を呪つた……お前はそれを信じたらう。信じないものか……信じなくていゝのだ！　信じなくていゝのだ！　お前は俺が昔どんなに可愛がつたか覺えてゐるかい？　今ぢやそれどころか幾層倍もお前を愛してゐるのだ。眞心からな……お前のためなら此の心臟も捨てゝ了ふよ……あゝ歡ばしい！」

「私を接吻して下さい。お母さんのなすつたやうに……脣にも、頰にも……」ナターシャは張りのない嬉し涙に暮れた聲で叫んだ。

「ナターシャ！　お前は俺達の夢も見たことはあるまい？　俺は毎晩お前を夢に見た。俺はお前に泣いてやつたよ。一度なぞはこんな小さい子供になつて來た……ピアノを習ひ始めた時分のな……それに、お前は意地惡な娘だ！　俺がお前を家に入れないと思つたのだらう！　俺はな、ナターシャ幾度お前の許へ行つたか解らないのだよ。お前の窓下に立つたり、戸口へ立つたりしてゐたのだ！　お前が偶然と出て來やしないか、と思つてね！　お前の窓にはよく蠟燭が燈つてゐ

たね。俺は窓にさすお前の姿でも好いから見たいと、何時もお前の許に行つたのだ。だがお前の心は俺が窓下に佇んでゐたのを感じたかい？」

彼は立ち上り、彼女を椅子から抱き擧げて、堅く胸に彼女を壓しつけた。

「彼女は又私の心に復つた。神樣！　感謝します。我々は踏み躙られても侮辱されても好い。我我はまた元通りになつた。傲慢な憎むべき奴輩は勝手につけ上るが好い。もう怖れてはゐないのだ！　ナターシャ！　俺は斯う言つてやる。俺の可愛い娘だ！　お前たちは彼女を踏みつけたり侮辱したりした。だが俺は永遠に可愛がり祝福するのだ！」

「ネルリは何處に居る」と老人は四邊を見廻して言つた。彼女は何時か寢室に紛れ込んで臆病らしく隱れてゐた。

「まあ私達はあの娘を邪魔者にしてゐたのだよ！」と老婆は叫んだ。

「ネルリ！　お前は如何したのだ？」と老人は叫んで、彼女を抱き上げようとした。

彼女は暫く彼をぢつと眺めてゐた……

「お母さん！　お母さん！　私のお母さんは何處です？　何處にいらつしやる？」とネルリは失心したやうに言つた。

と彼女は更に私達の方へ、震へてゐる手を伸ばしながら繰返した。突然物凄い、怖ろしい叫び

聲が彼女の胸から奔り出て、痙攣が彼女の顔を通つたと思ふと、彼女は恐ろしい發作を起して座敷の上にぶつ倒れた……。

終篇

最後の追想

六月半ばの或る蒸し暑い日のこと、市中は耐へられない程、熱氣に蒸れ上つて居たが、何處かで遠雷が鳴り始めたと思ふと、空が暗がり始め、やがて大粒の雨がぽたりぽたり落ち掛つて、忽ち蒼穹を一度に開いたやうに、大雨が街に注がれた。三十分もして再び太陽が射し始めた時、私は窓を開いて、新鮮な空氣を吸ひ込んだ。私はペンを擱いて、ワシリエフスキイ島の人達の許に駈け出し度くなつた。然し如何しても仕遂げねばならなかつたので、其の誘惑を撃退して紙に向つた。夕方になつて漸く仕事は終つた。久し振りに私は自由と金を得るのだ。私は原稿を持つて先づアレキサンドル・ペトローウキツチの家へ宙を飛んで行つた。彼は愛想よく私と握手し、私の健康を尋ねた。彼は文學に出版者の必要を知り、生涯出版屋であつた。彼は約束の五十留を出しに金庫に近寄つた。

そして或る反對派の雜誌を取出して來て、批評欄を指して示した。其處には最近の私の小説に

就いても二言三言書いてあつた。

私の文章は概して(汗臭い所がある)と言つてあつた。私と出版者は一緒に笑つた。アレキサンドル・ペトロウツチは自分の別荘へ行くので、私がワシリエフスキイ島へ行くと聞くと、馬車で私を送らうと言つた。

馬車の中で彼は幾度も現在の文學に就いての話に落ちて行つた。私は默つてそれを聞いて居た。ワシリエフスキイ島に到着した時、彼は私を下車さして呉れた。私はイフメニエフの家へ急いだ。アンナ・アンドレウナが私を見つけると、手を拂つて、シツー　と言つた。

「ネルリが今寢ついた所ですよ、可哀相に、眼を覺まさないやうにして下さい。すつかり衰弱してゐるのですからね。皆心配してゐるのですよ、ワーニャさん！　隨分お待ちしてゐたのよ。二日もいらつしやらないのですもの！」と彼女は私に低聲で言つた。

「だつて仕事が片づくまでは來られないと言つたでせう！」

「今日のお夕飯にはいらつしやる約束でしたよ。それで、ネルリを床から起して食堂へ連れ出したのですよ。するとワーニャさんを待つてゐたいと言ふのです。所が貴方は來ないのですもの……罪ですよ。然し機嫌よく眠りましたよ。お祖父さんは街へ出掛けましたが、小夜食の時分には歸りませう。それから勤め口も有りましたよ。如何かと思はれるのは、ペルミの方ですから

ね……」

「ナターシヤさんは？」

「庭に居ますよ。いらつしやいませ。良人は彼女が樂しさうに不足なしだと思つてゐるのですが、私は信じられないのです。ワーニャさん！　こつそり彼の娘を見て下さいな」

私は庭の方へ駈け出した。

「もうお仕事は終つて？」と彼女は訊いた。

「今夜すつかり……」

「隨分骨が折れたでせう？」

「然うですね、然しそんな事は何でもありませんよ。」

私は近頃ナターシヤが私の文學上の成功と名譽に配慮するやうになつたのを認めてゐた。

彼女は私の作品を全部讀了して、時々私の將來の企圖を聞き質したりした。又私への他人の批評に腹を立てたりして、私が文學で立身するのを眞面目に望んでゐた。私は彼女のこの傾きに驚かずにゐられなかつた。

「何か目新しい事でもありませんか？」

「有つてよ、彼の人の許から手紙が來たのよ」

「また？」

「さうよ！」と言つて、彼女は私に手紙を見せた。それは別れてよりの第三信であつた。第一信はモスクワからで、ペテルブルグへモスクワから歸れなかつた譯を興奮した樣子で書いてあつた。第二信は一刻も早くナターシヤと婚禮を擧げるために、近く歸ると書いて有つたが、そこには、彼の絶望してゐるやうすが現然と見えてゐた。それに當事者以外の勢力が彼を苦惱させてゐることが解つた。

私は第三信を披いた。それには彼が田舍へ行つてから侯爵の希望に反抗するだけの力の乏しい事を告白してあつた。同封のカーチヤの手紙には簡單に、アリョーシヤが悲しみ悶えてゐる事、絶望してゐること、少し病氣である事、彼女と一緒だから何時かアリョーシヤも幸福になるだらうと書いてあつた。

私達は顏を見合つて、それに就いて何とも言はずに居た。私達は一際過去の事に關しては話しを避け合つた。彼女は忍び難い苦しみを續けてゐた。私にはそれが解つた。

近々に老人は求職して、我々は間もなく別れねばならない事を察してゐた。が、私の事を細かく注意して呉れた。それには、彼女が過去の事に對し返禮してゐる樣に私には思へた。然し此の苦痛は直ぐ去つた。私は彼女がそれ以外の望みを持つてゐることに氣附いた。彼女は私を愛し、

私の事は何でも心配せずに居られないのであつた。

近き將來の吾々の別離が彼女の心を堪へられなくし、その爲めに苦しんでゐるのを私は察してゐた。然し私達はその事に就いては觸れないでゐた。私は老人の事を聞いた。

「お父さんは求職の事で忙しいですか？」

「えゝ……勤め口はあつたのですよ。今日行つたのは用件はないのでせうよ」

「では如何したのでせう？」

「それは私に手紙が來たものですからでせうよ……私にあんなにまで遠慮していらつしやるのよ。私は氣詰り位ですよ。お父さんは、私が如何して暮してゐるか、何を考へてゐるだらうかとそれ以外のことは考へてゐないと思ひますよ。私の心配は一つ一つお父さんの心配なんです。でも時々私の事など關つては居られないと言つたやうに見せたりなどするのです。お母さんはそんな時何時も溜息つくのですよ！　生一本の人ですからね」と彼女は話した。私達は二度程庭を歩き廻つた。

「昨日も、今日も、マスロボーエフさんがいらつしてよ。」と彼女は言つた。

「彼は近頃よくお宅へ來ますね」

「何故かお母さんは彼を信用し切つてゐるのですよ。彼が何でも解決することが出來ると思つて

るるのですよ。法律家ですから何でも心得てるるのでせうね。お母さんは私が侯爵夫人になれなかつたのが殘念でせうよ。で、マスロボーエフさんにお話ししたのですよ。で、彼が如何か救つて呉れないか知ら、法律で……位にね、」とナターシャは笑つて言つた。「彼の惡漢に何が出來るものですか？　如何して貴女はそれを知つたのです？」

「お母さんの謎から解つたのよ……」

「ネルリは如何な風ですか？」

「貴方はまああの娘のことをお聞きにならなかつたのね」とナターシャは私をとがめるやうに言つた。

ネルリは此家の偶像になつた。ナターシャは熱烈に彼女を愛した。ネルリは遂に自分の心を彼女に與へて了つた。

彼女は過去の疑ひと偏屈の心持ちは全然變つて、今では周圍の溫かい愛情に對し病的な熱誠で酬いてゐた。彼女は第一にナターシャを、次に老人達を熱愛した。私はまたそこに行かなければ彼女の病氣に觸る程無くてならない者であつた。彼女は永久にイフメニエフの家に置かれることになつた。彼等の出發は間近かになつて來るのに、彼女は重症になる一方であつた。然し彼女は赤子のやうに快活になつて、老人とおどけ合つたり、老人に調戯つたり、自分の夢を話したりし

た。老人は毎日歡んで（自分の小さい娘のネルリ）を見て滿足してゐた。

「あの娘は神樣が下すつたのだ、私達の苦勞の代償に……」と彼は私に言つた。

毎夕私達が皆集る時分にイフメニエフ一家を眞から慕つてゐる老醫もやつて來た。ネルリも椅子に乘せて、卓が取まいてゐる私達の方へ連れて來た。彼女は何時も物靜かに私達の話に聞き入つてゐた。時に自分も燥いで、何か皆のやうに話しかけた。がそんな時には私達はいつも心配して聞いてゐた。彼女の身の上話には觸れてならない事があつたからである。醫者は殊に此の身の上話に反對で、話頭を何時も變へるやうに骨折つた。

然し彼女の病氣は重るばかりであつた。ドクトルは私に彼女の末期が思つたより早いかも知れないと言つた。私はイフメニエフ夫婦を愕かすのを怖れてそれを知らせなかつた。老人は出發迄には彼女は恢復するだらうと信じ切つてゐた。

「そらお父さんのお歸りよ。さあ參りませう。ワーニャさん」とナターシャは彼の聲を聞き出して言つた。

イフメニエフは部屋に入るか入らない間に、例の癖で大聲に話し出した。老婆は手を振つて老人を靜まらした。

「二週間も經つと行けるかも知れない」と彼は求職口があつたと言つて喜んで居た。

「行かう行かう！　お前と別れるのは辛いが、致方がないな、ワーニヤ！　場所でも變はれば、俺達も生き返るかも知れん」と彼は言つて自分の信じ方を喜んでゐた。

「然しネルリは？」とアンナ・アンドレウナが言つた。

「ネルリ？　あゝ病氣だよ、だが其時には癒るだらう。彼女は熟睡したかい。今眼を覺ましてはゐないだらうね」

然しネルリは此時眼覺めて居た。私達は例の通り卓を取卷いた。ネルリが椅子で運ばれ來た。ドクトルが來た。マスロボーエフも來た。ネルリは此晩何か悲しみ深いやうに考へ込んでゐた。然しマスロボーエフの彼女の爲めに持つて來た連翹の花束を喜んで見てゐた。

「そんなにお前は花が好きか？」と老人が訊いた。

「好きよ、私は花を持つてお母さんに會ひに行つたことがあつてよ。私達が未だあちらにゐた時分、お母さんは一月中も病のことがあつたのよ。其時、私はゲンリフと相談してお母さんがお床を離れた時、花で室中を飾ることにしたのよ。其晩、明朝は一緒に御飯を食べに起きて來ると、お母さんは仰言つたの。で私達は早く起きて室中を薔薇や水仙やそれから名も知らない花で飾つたのよ。お母さんは隨分吃驚なさつて喜んだわ。ゲンリフもね。私はまだよく覺えてゐるのよ」

とネルリは言つた。此晩ネルリは特に萎つてゐた。

ドクトルは氣遣しさうに彼女を見てゐた。彼女は非常に話したがつた。彼女はあちらでの思ひ出ばなしをした。私達はそれを止めようとしないでゐた。彼女はお母さんやゲンリフと一緒に處處旅行した。彼女は胸を躍らせながら、青い空の事、氷雪を冠むつた高峰の事、イタリヤの湖の事、花や木の事、田舍の人々やその着物の事、會つて見た事、經驗したこと、種々話した。それから宮殿の事、灯で彩られた圓頂の殿堂の事、碧い空と青い海を持つた南方の市街の事、次へ次へと話した。此晩程ネルリが思ひ出を話した事はなかつた。私達は注意深くそれを聞いてゐた。

然しネルリは酷く惡くなつて來た。で彼女を寢床に運んだ。老人は彼女に餘り話させたのを非常に悲しんだ。彼女は發作のやうな狀態に襲はれた。それが終つた時ネルリは私を見たいと切望した。

「ワーニヤさん！」と私達が二人になつた時ネルリは言つた。「私は彼等が私も一緒に行くと思つてゐる事は知つて居るのよ。だけど行けないわ。私、貴方の許に殘つてよ」

私は彼女にイヲメニエフ一家の者は彼女を實の娘と思つて愛してゐる。それで彼女を欲しがるだらうと說いた。

「駄目ですわ。私よくお母さんの夢を見るのよ。お母さんは私にお祖父さんを放つて置くのは罪深いと仰言るのよ。私こちらに居てお祖父さんの許に行きたいわ」

「お前のお祖父さんはもう死んでしまつたぢやないか？」私は驚いて言つた。

彼女は熱つと考へた。そして私の顔を見た。

「ワーニヤさん！　もう一度お祖父さんの死んだことを話して下さいな、すつかりね。」

私は彼女の望みに驚いたが、詳しく話すことにした。彼女は熱心に私の話を聞いた。

「否！　ワーニヤさん！　お祖父さんは死んでゐないわ！　私が（だつてお祖父さんは死んですよ）つてお母さんに言ふと、それは私に態と人が話したので、お祖父さんは矢張り今でも物貰ひして歩いてゐるつて言つたわ」

「ネルリー　それは夢だ。お前が病氣だからよ」

「私も夢だと思つたのよ。だから貴方だけに話したかつたのよ。今日はお祖父さんの夢を見たのよ。あの人は自分の家に坐つて私を待つてゐたのよ。そして二日も何も食べないのだと言ふのよ。そして非常に私を怒るの。嗅煙草もないぢやないか、俺は煙草なしでは生きて居れないつて。ワーニヤさん！　お祖父さんは眞實さう言つた事があつてよ。で私考へたの――橋の上に立つて、お金を貰つて、お祖父さんにパンと馬鈴薯と煙草を買つて上げようとね。で、私は夢でお金を貰つてゐるのよ。するとお祖父さんはお金を直ぐ持つて行くのよ。そんな事しなくても皆上げると言ふと、お前は今五哥かくしたと仰言るのよ。私は泣いたわ。するとお前は五哥盜つたと言つて

私を酷く打つたの。私は大泣きしたわ。でね、ワーニヤさん！　お祖父さんはまだ何處か歩いてゐて、私を待つてゐるのよ。」

私はそれを信じさせまいとして遂々說伏した。彼女は眠るとお祖父さんを見るから眠るのが怖しいと言つて、私に抱きついた。

「矢張り別れたくないわ、お祖父さんがゐなかつたら、私は貴方と離れないわ」と彼女は言つた。私はドクトルにこの話をして、病氣の樣子を聞いた。

「分りませんな！　だが恢復の見込はないですなー　如何も私の娘のやうで可哀相でなりません。いゝ子ですな。頓智のある子でしてな」

イフメニエフは非常に心配の樣子であつた。

「ワーニヤ！　彼女は非常に花が好きだから、明日花の饗應をしてやらうかと思ふよ。ゲンリフと母親にしてやつたやうにな！」と彼は言つた。

「それはその影響が彼女に障りますよ」

「然し快い影響は何でもないよ。快い影響は病氣を忘れさせるものだ」

老人の此の考へ附きは非常なものであつたので、彼に反對も出來なくなつた。老人は早速帽子を執つた。そしてこの仕事に掛つた。

「この近處に立派な温室があつて、庭師が花を賣つてゐるのだ。大變廉いのだよ。
おや、お前は歸るのかい？　仕事は濟んだぢやないか？　急ぐことはない。宅へ泊りなさい。
そして朝早く起きて室を飾らうよ。ナターシヤも手傳ふだらうから……」
私は遂に泊ることにした。ドクトルとマスロボーエフは暇を告げて出て行つた。私が老人に挨拶して二階の室へ行くと、意外にマスロボーエフが私を待つてゐた。
「ワーニヤ君、僕は途中から歸つて來たのだよ。今話した方が良いやうだから……あの件だがね馬鹿化た事になつたのでよ！」
「何の事かい？」
「例の侯爵の悪漢が怒つたよ。二週間許り前にね」
「君は何か侯爵と關係してゐるのかね？　何だい？　何だい？」
「僕は或る實證を握つたのだ！　最も證據と言ふやうなものはないが、考察の結果でね。或は……侯爵の實娘でないかとね！」
「何だつて？　君！」私は吃驚して言つた。
「是は大事な事だ！　その結果からして……」
「結果つて、君！　何も證據があるつて言ののぢやないよ。仕事はさう片づくものぢやないよ。

是は嚴密なんだよ。さう思つて置いて呉れ給へ……斯う言ふ譯だ。未だスミットが死なない前、侯爵がワルシヤワから歸つた許りの時に、此事を始めたのだ。彼は巴里でスミチイハを捨てゝから十三年になるが、その間絶えず女の樣子を見てゐたんだ。ゲンリフと同棲して居る事もネルリの居ることも。だがそれからぷつつりと見失つたのだ。多分ゲンリフの死後スミチイハがペテルブルグに立つ時からららしい。彼は不圖女がペテルブルグに居はしないかと考へついたのだ。で餘り公の手段を取り度くないと言ふので、僕に話したのさ。所が皆目ほんやりした話なんだ。話工合が曖昧で錯誤だらけなんだ。で正直一方で始めたのだが、一寸考へたよ。第一彼は必要な事を僕に話したか、又は必要な事にして話した中に言はれない他のものが祕されてゐやしないかとね……所がそれを嗅ぎ出したのだ。彼奴は何か怖れてゐるのだよ。親父の許から女を誘拐して、女が縁續になつたから捨てたのだ。是しきの事はほんの戯れ事だ。外の人ならいざ知らず、侯爵とも有らう人間の怖れる筈がない。で、僕はゲンリフの從妹を通じて興味ある事實に出會つたのだ。ゲンリフは其女に手紙や日記を書いてやつたのだ。その中から僕はスミットを知り、娘に盜まれた金の事、それを捲上げた侯爵の事を知つたのだ。又その中から侯爵がスミチイハと結婚した事を知つたのだ。だが何處で何時やつたものか證據があがらないのだ。そして遂にスミットを探し出したが突然死んで了つた。と、も一つ疑問の女の死がワシリエフスキイ島にあつたのだ。調査

の結果一つの事實に出會したのだ。そら君と會つた時だよ！　其時ネルリが僕を助けて呉れたよ……」

「ぢや君はネルリが知つて居ると思ふかね？」

「何を？」

「彼女が侯爵の娘だつて事を」

「君でも知つて居るだらう。彼女は侯爵の實娘なんだ」

「マスロボーエフ君！　彼女はそれを知らない上に、全く私生兒だよ。でないなら母親が自分の子供を孤兒にして置くやうなへまはしないよ。そんな事があるものか？」

「僕もさう考へたものさ！　所がだ、スミチイハと言ふ女は世界一の馬鹿女なんだよ。第一ぞつこん焦れて焦れ拔いて信じ切つてゐたのに欺されて捨てられたのだ。で、此の變化に耐へ切れないで、傲慢にも侮蔑を以て、總ての關係も書類も放棄して了つたのだ。金も汚物のやうに投げつけたのだ。親父のものとも氣附かないでね。要するに欺いた奴を一生侮辱する權利を持つために彼の妻ですと言ふことを不名譽にしたのだ。それにネルリに死際、あの人の許へ行くな、て言つてゐるぢやないか？　そして僕はブブノワの所の或女にスミチイハが侯爵に手紙を書いたことを聞いたよ……」

「それは屆いたのかい？」私は耐へ切れなくなつて叫んだ。

「それがしかと解らないのだ――スミチイハが今の女に侯爵への手紙を託したのだが、後で取戻したのだ。然しその手紙を送つたらしい一つの根據があるのだ。彼女がペテルブルグの何處に居るか、侯爵は知つてゐたから」

「で其のさきは如何した？」

「僕がいくら如何しても歴とした證據を得る事が出來なかつたのだ。僕はそれも事實以上知つてゐるやうな顔で、氣を惹いて驚かす方法があるとだけ知つてゐたのだ……」

「それで如何したのだい？」

「彼奴流石に俺を欺さなかつたよ。だが酷く怖れてゐたよ。で、僕はどの程度に俺を怖れてゐるか、彼の前に馬鹿になつて見せたり、露骨に狡るさうにしたり澁い顔で嚇したりして、量つて見たよ。あの惡漢すつかり見拔いたのだ！　矢張り話し出さないのだ。」

「で竟り如何したのだ？」

「如何もしないよ。俺には證據があがらなかつたのだ。只俺が一騒動起すことが出來る事だけ解したのだ。彼は騒動を怖れてゐるのだ。それに彼は結婚しようとしてゐるのだ。知つてゐるだらう？」

「知らないよ」

「來年にだよ。その嫁が漸つと十四歳なんだよ。可哀相なものさ！　彼には妻の死ぬのが常に必要だつたらうさ！　娘は金持ちの娘なんだ。しこたまあるんだよ。僕達は斯う言ふ結婚だけはよさうよ」

と、マスロボーエフは、拳で卓を叩いて叫んだ。「それで彼奴が俺を欺したのだ、二週間前に……」

『如何したのだい？」

『彼奴俺の所に壓としたものがないと知つたらしいのだ。俺は事件を長びかせると、彼奴に俺の無能を知らす譯だから、遂に二千留だけで諾したのだ」

「君は二千留取つたつて？」

『鼻を壓へて取つたよ。頭を下げてね」

「マスロボーエフ君、それは餘り酷いよ。ネルリを如何する考へだい？　ネルリを安穩にしてやる義務さへ有るのに！」

『然うだよ、だが如何してそれをやるのだ！　嚇すのか？　もう驚きもすまい！　俺が金を取つたのだから……」

「で、ネルリの事はそれで望なしだね！」

「是で放つて置けるものか？　彼奴は要するに俺を欺して嘲笑つてゐるのだ！　是からネルリを持ち出して見せる。彼女は總てを知つてゐるのだ……母親が親しく話したのだから……殴による と證據書類にでもありつけるかも知れない……」と彼は身震ひして言つた。

「これで僕が君の許を訪問する譯も解つたらう。第一に君への友情だ。それからネルリ見にだ……それから君に一つ助力して貰ひ度いのだ。君はネルリに對して勢力があるからな！」

「承知したとも、一つネルリのために骨折つて呉れ給へ。君の利益に留まらず、哀れな、侮辱された孤兒の爲めに……」

『誰の爲めに僕が働くのだ！　君も呑氣な人間だよ。主として孤兒の爲めだよ。だが俺も貧乏な人間だ。無暗に悪く言ひ給ふな！　貧しい人間を彼奴に侮らせてはならない。彼奴は俺の所から大事なものを取つたのだ。それに彼の悪漢は僕を欺したのだ。だから君の言ふ通り、あの悪漢に絶度意趣返しゝてやるよ！」

然し私達の花の日は出來なかつた。ネルリは更に悪くなつて、永久に此室から出なかつた。二週間の後彼女は死んだ。此の死の間際の二週間と言ふものは、彼女は生氣に返る事も、奇怪な妄想からも脱する事が出來なかつた。時々はつきり物が識る時があつた。一度私達二人になつた時熱ばんだ手で私の手を握つて、言つた。

「私が死んだらね、ナターシャさんと御一緒になつて下さい」彼女は前以て考へてゐたやうであつた。私は默つて笑つた。彼女は私の微笑ににつこりとして、いきなり私に接吻した。死ぬ三日前、美しい夏の暮方であつた。彼女は窓幕を揚げ、寢室の窓を開けて呉れと賴んだ。彼女は長い間濃い綠草や落日を眺めてゐたが、突然私と二人にして呉れと言つた。

「ワーニャさん！　私直き死にますわ。私紀念に之を貴方に殘しますわ（護符囊を私に指さし）そして此の中のもの讀んで下さい。

そしてあの人の許に行つて、私は死んだが、その人を赦さなかつたと言つて下さい。そして、汝の敵を愛せ、と讀みましたがあの人だけは赦さなかつたとね。それはお母さんも死際に言つてよ。私はお母さんの爲めにあの人を呪つてやるの……それからお母さんの死んだ事も、私がブブノワの許に殘された事も話して下さい。そして、あの人の許に行くよりブブノワの許にゐる方がましだつてね……」

彼女は斯う言つて了ふと枕に顏を埋めて、二分間も口を利く事が出來なかつた。

「皆さんを呼んで下さい、ワーニャさん！　お別れしますから……」遂に纖細い聲で言つた。家の者が入つて來た。老人は彼女が死ぬと言ふことを頭に入れる事が出來なかつた。彼は終りまで私達と爭つて、彼女は恢復すると信じてゐた。明る日は彼女は物が言へなかつた。二日目に彼女

は死んだ。

私は老人が沈み切つた心で、彼女の細つた死顏や、氷りついた微笑や十字に重ねられた手を見てゐたのを憶えてゐる。皆して彼を慰めたが彼の嘆きは安まらなかつた。

老婆は彼女の胸の護符囊を渡して呉れた。此の中には侯爵宛の亡きネルリの母の手紙があつた。ネルリの死んだ日私はそれを讀んだ。彼女は彼を赦すことは出來ないと言ひ、自分の其後の生活や、ネルリを殘して行くことの危憂を書き、子供だけでも如何かして呉れと祈つて居た——此娘は貴方の實の子です。私が亡くなつたら、貴方の許に行けと言つて置きました。そして此の手紙を遺れと。ネルリさへ貴方が斷らなかつたら、私は冥土で貴方を赦すかも知れません。ネルリは手紙の內容を知つてゐます。私は何も彼も聞かせてあります——」然しネルリは遺言を果さず恨を呑んで死んで了つた。ネルリの葬式から歸つて、私はナターシャと庭へ行つた。彼女は暫く妙な眼差で私を見て居た。

「ワーニャさん！ほんに夢でしたわね！」

「何が夢ですか？」

「何から何まで……此の一年中の出來事は……私は何だつて貴方の幸福を破つて了つたのでせうね？」

私には彼女の眼が讀めた――貴方と御一緒でしたら、私達は何時までも幸福に生活が出來るでせうが。――

虐られし人々 終

譯述双書
（虐られし人々）　定價金壹圓六十錢

大正十三年十月廿五日印刷
大正十三年十月廿八日發行

譯者　佐々木味津三

編輯者
發行者　東京市日本橋区通四丁目五番地　和田利彦

印刷者　東京市京橋区南鍛冶町十一番地　川村清次郎

印刷所　東京市京橋区南鍛冶町十一番地　川安印刷所

發行所　東京市日本橋區通　春陽堂
振替東京一六一七番
電話本局五一一番
四二一〇番

發行者

春陽堂譯述叢書

發刊の辭

吾讀書界は本叢書の出現を要求してゐる。翻譯も素より貴い收獲に違ひないがも一つ直通した生命の流に打たれたいのが吾人の希望である。こゝに既に幾通りかの翻譯の有る推しも推されぬ名著傑作二十五篇を選んで「文藝春秋」諸作家の手によつて原作の醍醐味をあざやかに活かし傳へられたのが本叢書である。一般讀者は素より特にホンヤク嫌ひの人々に敢てお薦めします。

サアニン 露アルツイバアセフ作 佐々木味津三氏著

コロンバ 佛メリメエ作 加宮貴一氏著

死の勝利 伊ダヌンチオ作 齋藤龍太郎氏著

サツフオ 佛ドオデエ作 齋藤龍太郎氏著

四六新型・價各一圓六拾錢・稅十八錢

527
703

終